

飯山市埋蔵文化財調査報告 第58集

東原遺跡

HIGASHIHARA

SITE

—— 築堤地点 ——

1998・3

飯山市教育委員会

例 言

- 1 本書は長野県飯山市大字照岡字原に所在する東原遺跡発掘調査報告書である。
- 2 東原遺跡は昭和24年にa～cの3地点が発掘調査され（第一次調査とする）、昭和27年にも桑名川郵便局の地点が発掘されている（d地点・第二次調査とする）。また、平成6年にはe地点（第三次調査）の試掘調査が行われ、同年中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う試掘調査も実施されている（f地点）。

今回の調査地点はかつてのb・c・d地点を含む東原遺跡の主体をなす部分で、築堤地点とする。

- 3 発掘調査は、平成7年11月に（一）千曲川における河川改修事業（広域B）に伴い長野県北信地方事務所より委託を受けた飯山市教育委員会が、平成8年（平成7年度繰越）・9年度事業として実施した。
- 4 発掘調査に係る関係者は以下のとおりである。

飯山市関係（平成8・9年度）

飯 山 市 長	小山 邦武
飯 山 市 教 育 委 員 長	滝沢藤三郎（～平成8年10月）
◇	丸山 登（～平成9年10月）
◇	清水 長雄（平成9年10月～）
飯 山 市 教 育 長	岩崎 彌
教育委員会事務局教育次長	月岡 保男（平成8年度）
◇	井出 澄夫（平成9年度）
◇ 生涯学習課長	山崎賢太郎（平成8年度）
◇	平野 英孝（平成9年度）
生涯学習課社会教育係長	町井 和夫（平成8年度）
◇	山室 茂孝（平成9年度）
◇ 社会教育係員	望月 静雄

長野県飯山建設事務所関係

飯 山 建 設 事 務 所 長	平野徳三郎（平成8年度）
◇	桜井 忠彦（平成9年度）
◇ 担当技師	平沢 達郎

調 査 団

団 長	高橋 桂	飯山市文化財保護審議会長
担 当 者	望月 静雄	教育委員会事務局職員
調 査 員	常盤井智行	
	田村 混城	
	小林 新治	（平成8年度）

発掘作業参加者（順不同）

橋口栄・鷺尾ハナ・宮本朋子・初見清・吉越宗男・月岡みつえ・月岡富代・石沢悦次・万場義秋・大熊直三・高橋喜久治・土屋久栄・植中高見・岸田志づ子・宮本鈴子・斉藤昭子・小田切仁・斉藤元義・松島秀子・保坂あや子

整理作業参加者（順不同）

藤沢和枝・小林裕子・栗岩容子・小林正子・望月洋子・小林美里・水野あや子・桃井伊都子

指導・協力者・機関（順不同・敬称略）

桐原健・宮下健司・早津賢二・小島正己・綿田弘実・田中清見

桑名川区・馬場区・築堤促進委員会・岡山公民館・地権者（鷺尾新太郎・小田切英一・小田切俊子・小田切伊之助・吉越宗男）

6 本書で使用された方位は真北である。

7 本書の作成は、高橋桂調査団長指導のもと、担当・調査員が主体となって行った。

遺物実測は、藤沢和枝・望月静雄・常盤井智行が行い、図面トレースは藤沢和枝・望月洋子・小林美里があたった。編集は望月が行った。

文責は目次に記した。

8 発掘調査の図面・出土品は、市内大深の飯山市埋蔵文化財センターに保管している。

9 本書では時間的な都合により、遺構・遺物について十分に取まとめることができなかった。特に土器については改めて報告することを銘記し、お詫び申し上げる。

目次

例言

第1章 遺跡の位置と環境	(望月 静雄)	1
1 地理的環境		1
2 歴史的環境		1
第2章 調査経過		3
1 調査に至る経過		3
2 調査経過		4
第3章 遺跡の概要		5
1 過去の調査と研究	(高橋 桂)	5
2 既出遺物	(常盤井 智行)	7
3 馬場古墳		11
第4章 発掘調査		13
1 発掘調査の方法	(望月)	13
2 遺構		13
A 住居址		13
B 土坑		13
C 配石遺構		23
D 建物址		23
E 環状組石炉		23
3 遺物		44
A 土器	(常盤井)	44
B 石器・石製品	(望月)	47
C 土偶・土製品	(望月)	48
第5章 まとめ	(高橋)	89
写真図版		90

第1章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

東原遺跡は、長野県飯山市大字照岡字原に所在する。

甲信国境に源を発する千曲川が、信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると、千曲川は信越国境の峡谷地帯（通称市川谷）を下刻曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川と名を改め、いわゆる津南河岸段丘群を形成しやがて日本海に注ぐ。

東原遺跡は、飯山盆地を流下した千曲川が峡谷地帯を流れる左岸に立地している。この付近は両岸まで山地がせまりほとんど平坦地はないが、遺跡の所在する東原地帯は千曲川の河岸段丘や凹地が存在し、狭小な平地を形成している。遺跡はこのうち千曲川の形成した河岸段丘面に立地し、現在では遺跡の一部が千曲川の攻撃斜面によって削除されている。

遺跡の範囲は、住宅等が建てられておりいまひとつ明確ではない。過去の調査・研究によれば旧桑名川郵便局が建てられている場所を中心として微高地全面に広がるらしい。西北側は約100mで通称岡山上段と呼ばれる高位段丘面の段丘崖に接するが、その間は凹地状の湿地帯が広がる。このほぼ中央をJR飯山線が走っている。

2 歴史的環境

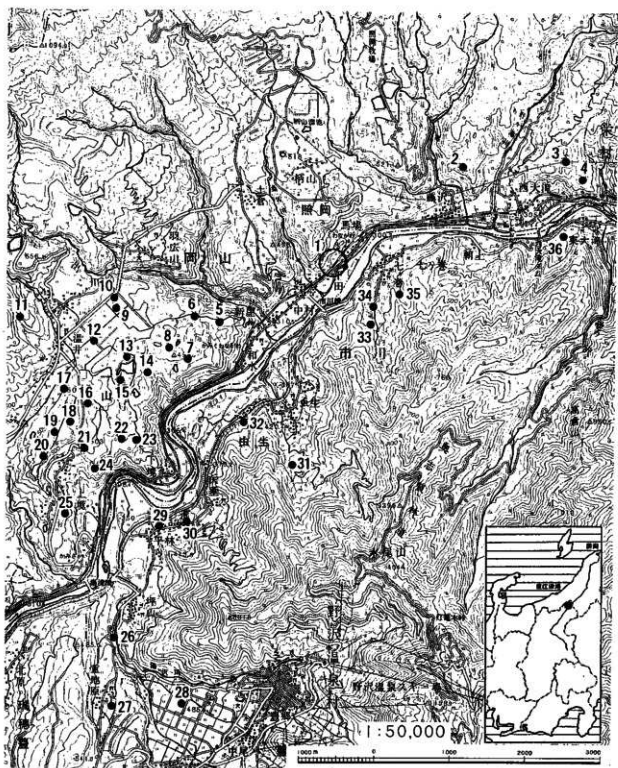
信越国境の千曲川峡谷地帯における埋蔵文化財包蔵地はいまひとつ明確でないのが現状である。これは多くが山林であり遺跡の所在が明確でないこと、大規模開発に伴う調査が少なかったことによる。近年、通称岡山上段地域において関東農政局による農地開発が行われ、それに伴う調査で多くの遺跡が確認された。また、野沢温泉村では村史編纂や国道バイパスに伴う調査によって遺跡の所在も徐々に判明してきている。以下に大まかではあるが年代別に説明したい。

旧石器時代 飯山盆地から栄村・新潟県津南町にかけては、旧石器時代の遺跡が密集することで知られている。東には栄村小坂遺跡、飯山盆地内には飯山市太子林・日焼・上野・関沢の各遺跡など著名な遺跡が多い。図1は、そうした遺跡の中間地帯にあたり、飯山新堤(14)・トト池南(19)遺跡、野沢温泉村蕨平遺跡(36)などは石器群も豊富である。特にトト池南遺跡は、エンド・スクレイパーを主体とする石器群で注目されている。今後ともこの地域に良好な旧石器時代の遺跡が発見される可能性が高い。

縄文時代 最古の縄文時代遺跡としては飯山市がカササギ野池遺跡(8)で爪形文土器が発見されている。飯山地方では最も古い縄文遺跡である。そのほか、大原・鳴沢頭遺跡(14)で表裏縄文土器や押型文土器が発見されている。遺跡の規模は小規模である。中期には野沢温泉村岡ノ峯・平林・七ヶ巻、飯山市向原遺跡などがある。そして、後期・晩期になると東原遺跡をはじめ、野沢温泉村蕨平・岡ノ峯など遺跡数は少ないが大規模で豊富な内容を持つ遺跡が見れる。蕨平・岡ノ峯遺跡では石棺墓が発見され、縄文時代の墓制研究の重要な遺跡となっている。

弥生時代の遺跡は、飯山盆地を北限として本地域には確認されていない。大型蛤刃石斧や弥生式土器細片が採集されることもあるが、生活していたと証する資料に欠けている。現在のところ、水稲耕作を新たに生業に加えた弥生文化は当地方まで波及しなかったと考えられるのである。

古墳時代の遺跡も確認されていない。ただし、東原遺跡に近接した馬場地帯には二基の古墳が確認されている。また、JR飯山線の敷設に際して、付近より土取りした時に勾玉や直刀が発見されているので、



- | | | | |
|---------------|-----------------|-------------------|----------------|
| 1. 東原 | 2. 下り尾 (縄) | 3. 西大滝 (縄) | 4. 大滝城 (安土桃山) |
| 5. 雨池 (縄) | 6. 藤屋の堤 (縄) | 7. 休場 (縄) | 8. カササギ野池 |
| 9. 水の沢 (先・縄) | 10. オリハンザ (先・縄) | 11. 温井城 | 12. 長者清水 (平・中) |
| 13. カツボ池上 (平) | 14. 鴨沢頭 (縄・平) | 15. 新堤 (先・縄・平) | 16. 中塚谷地 (先・平) |
| 17. 温井 (仮称、先) | 18. トトノ池 (縄・平) | 19. トトノ池南 (先・縄・平) | 20. 西外縁 (先・縄) |
| 21. 上塚 (先) | 22. カツボ池 (縄・平) | 23. 下境 (平) | 24. 雨池グランド (先) |
| 25. 中外 (先・縄) | 26. 坪山 (縄) | 27. 重地原 (縄) | 28. 岡ノ峯 (縄) |
| 29. 平林A (縄) | 30. 平林B (平) | 31. 虫生A (平) | 32. 虫生B (縄) |
| 33. アサヒラ (縄) | 34. 池ノ平 (縄) | 35. 二座 (縄) | 36. 藤平 (縄) |

図1 調査地の位置と周辺の遺跡

そのほかにも古墳が存在していた可能性が高い。これらの古墳については、生産基盤を有していた結果と視るよりも街道との関係で築造されたとする意見が強い。

平安時代になると再び遺跡が多く確認されている。飯山市長者清水(12)・新堤・トトノ池南遺跡、野沢温泉村虫生A(31)、平林(30)遺跡などである。いずれも小規模で、集落を形成していたかどうかは不明である。

引用・参考文献

飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡』

野沢温泉村教育委員会 1994 『蕨平遺跡』

第2章 調査経過

1 調査に至るまでの経過

今回の発掘調査は、長野県飯山建設事務所が計画した(一)千曲川 小規模河川改修事業に伴うものであり、用地買収等の関係から二か年に分けて実施する計画であった。第一年度はこれも予算等の関係により平成7年11月から平成8年3月までの発掘期間とし、平成8年度は整理期間、平成9年度は第二年度の調査および整理報告年度と計画した。しかしながら、平成7年度は降雪前の契約となったため、調査を実施することができなかった。結果的に、平成8年度を第一年度の発掘調査および若干の整理期間、平成9年度を第二年度の発掘調査および整理・報告書刊行期間とした。

発掘調査の結果、膨大な遺物量となり、加えて第一年度の発掘期間の延長もあって、ほとんど整理作業が実施できずに平成8年度が終了した。平成9年度はその影響もあり、発掘と一年度整理作業を合わせて実施したが、平成8・9年度の遺物洗浄・注記でさえ平成9年12月20日ようやく終了するという状況であった。

そのため整理作業・報告書刊行作業期間がほとんどないという状態であった。

以下に第一年度(平成8年度)、第二年度(平成9年度)の調査に至るまでの経緯を概略する。

(第一年度)

平成7年9月22日 平成8年度公共事業に関わる埋蔵文化財保護協議を行う。

出席者・県教委文化課市村指導主事、飯山建設事務所飯島課長補佐、同西村主査、市教委山崎生涯学習課長、高橋桂文化財保護審議会長、望月。飯山市岡山地区桑名川における小規模河川改修飯山に伴う東原遺跡の保護について協議。

10月11日 飯山建設事務所長より文化庁長官宛法第57条による通知を提出。

10月26日 長野県教育委員会教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、工事着手前に発掘調査を市教委に委託して行うというものであった。

10月19日 文化庁長官宛法第98条による発掘通知を提出する。

10月27日 県教委より発掘計画書並びに予算書が提出される。

11月20日 飯山建設事務所長より飯山市長宛(一)小規模河川改修に係る埋蔵文化財発掘調査委託についての協議書が提出される。

11月22日 同契約書を締結する。

平成8年3月14日 契約後直ちに降雪となったため調査できず、平成8年度事業として実施すべく委託契約書の変更契約依頼を飯山建設事務所長宛提出。

3月28日 変更委託契約書を締結。

6月18日 東原遺跡発掘に伴う地元説明会を開催。

6月19日 発掘調査を開始する。

(第二年度)

平成9年4月16日 文化庁長官宛法第98条による埋蔵文化財発掘通知を提出する。

5月12日 地元説明会を開催する。

5月28日 飯山建設事務所長と飯山市長との間で、平成9年度国補小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結する。

同日調査開始。

2 調査経過

平成8年度

調査対象地は、一部において用地未買収地区もあり、全面に重機を入れて表土除去できる状況ではなかった。

そのため、家屋移転がすみ最も着手できる調査地区北西地区より開始した。この部分は遺跡範囲の最も低くなっている部分であり、千曲川に向かって傾斜していた。また、黒色土が厚く堆積しており、細分された土層別に時期的に変遷過程が察知できる状況であった。トレンチにより概略判断すると最上層に加曽利B式段階があり、いくつかの土層を経て、中期前葉～中葉あたりまでたどれるようであった。なお、台地上部においては後期堀之内併行～加曽利B式併行期の土層のみの検出に終わっている。

また、縄文後期の生活面まで厚いところでは2mを超える砂質粘土層におおわれており、当該時期以降降水没した可能性があるかと判断できた。

平成9年度

8年度調査地区の南西側を調査した。やはり2m以上の粘土層におおわれていた。

また、桂穴が千曲川に向かって斜めになっており、地殻変動により遺構が動いた形跡が認められた。遺構の前記特殊性や膨大な遺物量のため、9月初旬によりやく終了することができた。

年度 月	平成8年度	平成9年度
4月		
5月		8年度遺物洗浄・注記
6月	発掘調査	
7月		遺物洗浄・注記
8月	整理	
9月		8年度終了
10月	図面整理	
11月		遺物実測 トレース
12月	報告書作成 完了	
1月		
2月		
3月		9年度遺物洗浄・注記

表1 調査工程表

第3章 遺跡の概要

1 過去の調査と研究

明治23年県道谷街道（大正9年国道10号線昇格、現国道117号線）が起工され、翌明治24年竣工した。この谷街道は、桑名川では東原丘陵地の中央部よりやや西側を南北に削り取って敷設された。『岡山林史』で江口善次氏は、「注意する人あったならば何か採集出来たであろうと思われるが、当時注意されずに終わったらしい」と述べられている。明治29年宮沢甚三郎氏が、人類学雑誌第12巻128号に「北信地方の石器時代遺跡」として旧下水内郡、下高井郡の遺物を紹介している。もし、東原で遺物が採集されていたならば、当然宮沢氏の紹介するところとなったことであろう。

東原遺跡が好事家の注目を集めるにいたるのは、県道谷街道が開削されてから30年ほど経過してからであった。大正10年代初頭、飯山鉄道が、桑名川の湿地帯を北東に向けて敷設に際し、湿地帯であるが故に線路を土盛りすることが必要となった。その土盛りの土砂の採取地として目を付けられたのが、小高く盛り上がった丘陵状の小台地の東原地帯であった。当時、谷街道敷設により台地の一部は開削つれていたが、台地の北方の道路両側は小高かったようである。この小高い道路西側の土砂を採取して線路の土盛りをしたようである。そして、この土砂採取の折に多くの遺物が発見された。縄文土器、石器のほかには勾玉、切子玉等も発見され、古墳が存在したことを示している。更には八後鏡も2面発見された。明治時代末から大正時代初めは、縄文時代人=アイヌ人説が広まっていた。縄文土器や石器はアイヌ人の使用によるものとの説が一般にも広まり、識者の古代への関心が高まっていた時期であった。岡山にも古代の遺物に興味をもち、村内各地の遺物を丹念に蒐集しておられた人物が二人いた。その一人は、いうまでもなく上桑名川の医師渡辺善平次氏であり、他の一人は温井在住の北条幸作氏である。

この二人によって、東原出土の遺物は採集保存された。勿論作業に従事した人夫より手に入れられたものである。このうち、渡辺氏蒐集の遺物は、藤森栄一氏の知る所となり、昭和9年史前学雑誌第6巻6号で「信濃下水内郡鳴沢頭出土の土器及び石鋸」という題で鳴沢頭出土遺物の資料紹介をされている。その文章の末尾に「信濃では稀有な加曾利B式を中心とする遺物で……」と渡辺善平次氏蒐集の東原出土遺物について述べられている。東原遺跡の存在が学界に初めて知られるにいたった記念すべきものであろう。

昭和18年藤森栄一氏は「信濃下水内郡桑名川の土器」という題で人類学雑誌58巻3号で渡辺善平次氏蒐集の東原出土遺物を詳細に報告されている。ここに東原遺跡が、県内でも縄文後期の著名な遺跡として知られるにいたったのである。

さて、渡辺善平次氏が蒐集された遺物は、どうなったであろうか。氏の死亡とともに多くは人手に渡ってしまったらしい。ただ一部が岡山小学校に寄付されたようである。私は昭和32年夏下水内郡下の踏査を試みた。その折、岡山小学校に立ち寄り理科室で東原出土の浅鉢形土器や鉢形土器、石器類を見た。これが恐らく渡辺氏が寄付されたものであろう。これらの遺物は、岡山小学校の改築とともに姿を消してしまっている。一方、北条幸作氏蒐集の遺物は現在で保存されている。渡辺氏の蒐集に比較すれば、いたって少量であるが。

さて、東原遺跡が再び脚光を浴びるのは第二次大戦後である。第二次大戦後、科学的歴史の確立を目指して、考古学研究が各地で盛んに行われるようになった。その波は、飯山地方にも当然波及した。飯山北高等学校では、森山茂夫、小田切茂、清水亨、田中清見氏等が中心となり郷土史研究会が設立された。この内、森山、清水氏は長峰を中心に、田中清見氏は有尾を中心に、小田切茂氏は東原を中心というように自らフィールドが決まっらしい。

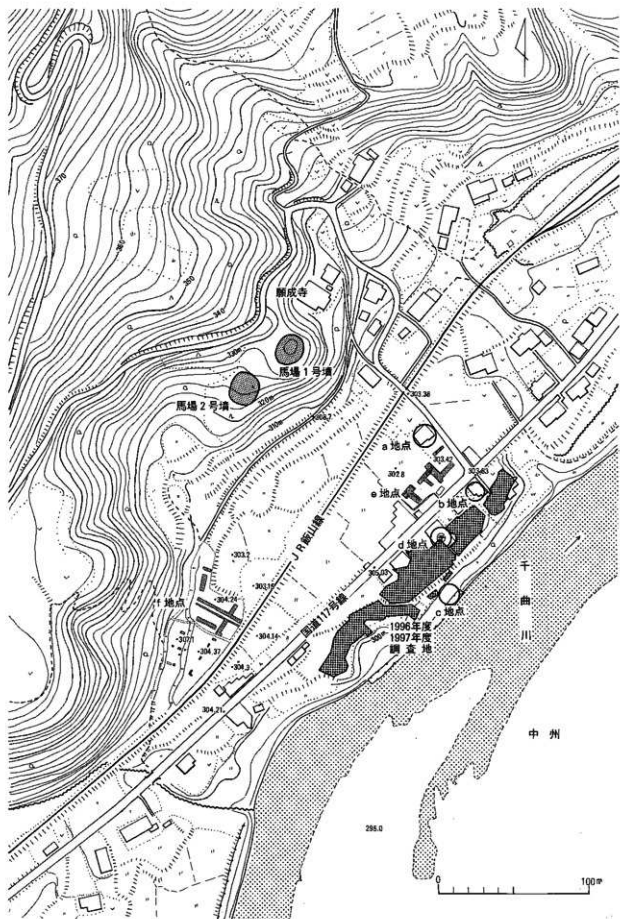


図2 調査地区 (1 : 2500)

小田切茂氏は、実家の近くということもあって、東原遺跡に興味と関心をもち、森山茂夫氏等と昭和24年7・8・11・12月と4回にわたって発掘調査を行なっている。小田切氏が行なった発掘は3地点にわたっている。a地点(北部)、b地点(東部)、c地点(南東部の川沿い)である。b地点で安山岩の平石で囲んだ炉址を発見している。各地点から縄文中期後半の土器、縄文後期土器、石皿、石鉢、石錐、石錘、軽石製浮石、土錘等多量の遺物が発見された。発見された遺物は、現在飯山市埋文センター、小田切茂氏宅に保管されている。そして、調査の結果は、長野県飯山北高等学校郷土研究会より「昭和24年度下水内郡遺跡発掘調査報告」とし発刊されている。このことについては、宮坂英武氏も日本考古学年報2(昭和29年度発行)に大略を紹介している。

昭和27年晩秋、飯山北高等学校郷土研究会は、神田五六氏を指導者として現郵便局の位置付近を発掘調査した。(D地点)そして、配石遺構と思われるものを発見し、縄文中期後半、縄文後期の土器を多量に発見した。小田切茂氏は、この調査を境に自分の仕事に専念され、考古学から去っていかれた。以後、東原遺跡は縄文後期の代表的遺跡として知られるだけで、何等の調査も行われなかった。かつてはきれいに手入れされていた畑も、一部はすっかり荒れ果てて雑草地と化している。今回、東原遺跡上に大規模な築堤工事が行われることになった。重要な市内の遺跡がまた一つ消えていく。複雑な心境である。

2 昭和24(1949)年出土遺物

昭和24年に飯山北高等学校郷土研究会が発掘した遺物の一部が残されていたので、ここで紹介する。24年の発掘はa～cの3地点を調査している。図示したもののうち13のコップ形土器がa地点出土品であるほかはすべてc地点出土品である。

1～4は中期後葉加曾利E式併行期に比定される。1は隆起線文で渦状の文様を施文する。口縁部が内湾する浅鉢であろう。砂粒を多く含む軟質で茶色を呈する。2は3条の隆起線文と羽状の集合沈線文をもつもので、新潟県に類似がある。砂粒を多量に含む淡茶色を呈する。3も羽状の集合条線文をもつもので当期に含める。砂粒を多量に含む茶色を呈する。4は沈線と、渦状の半隆起線文をもつ口縁部片である。胎土・色調ともに2と近似する。

5は波状口縁で、刻み目文帯の間に隆起線による口唇状の浮文を配している。中期の初産であろう。胎土に砂粒を多量に含む淡褐色を呈する。

6～12は後期前葉の堀ノ内式併行期に比定される。6は頸部に2条の刻み目突帯をもち、胴部は沈線と区画された磨消縄文による垂下文と「J」字状風の文様を配する。内面は丁寧に磨かれている。胎土に砂粒を含み茶色～暗茶褐色を呈する。7は波状口縁の頂部片で、口縁端部を肥厚させその内外面に沈線文を配し、外面頂部に円形刺突文を置きその下に刻み目突帯を垂下させている。胎土に砂粒を含み黄灰色を呈する。8は横位の帯縄文と、沈線文で囲む刺突文をもつ。胎土に砂粒を多量に含む黒灰色を呈する。9は波状口縁の深鉢で、口縁下に刻み目隆帯をもつ。頂部には3連の鎖状文を配する。磨消し縄文の文様は菱形が縦に連結するものと考えられる。内面は丁寧に磨かれている。胎土に砂粒を含み黒灰色を呈する。10は横位の帯縄文をもつ厚手の口縁片である。内面は丁寧に磨かれている。雲母・細砂を多量に含む暗褐色を呈する。11は口縁下に「8」字状の浮文と刻み目隆帯を配し、その下に帯縄文をもつ。文様モチーフは「()」と斜線が交互に配されるものと考えられる。口縁端部は内傾し内側に1条の凹部を作る。また、「8」字状浮き文の内側に円形刺突と輪状の突起をもつ。内面は丁寧に磨かれる。胎土に砂粒を含み黒灰色を呈する。12は形・文様パターンともに11に等しい。ただし帯縄文は渦状文である。胎土に砂粒を多

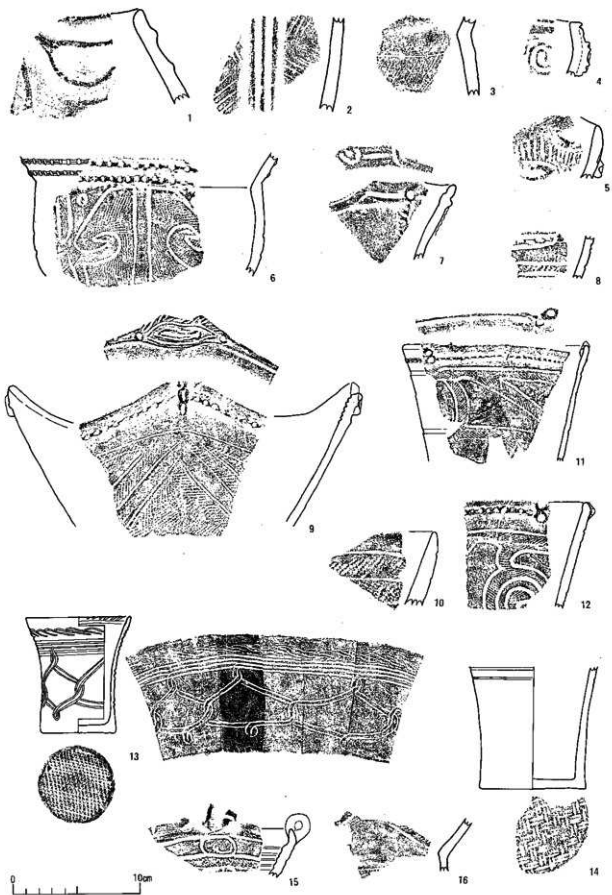


图3 昭和24年出土遺物(1) (1:3)

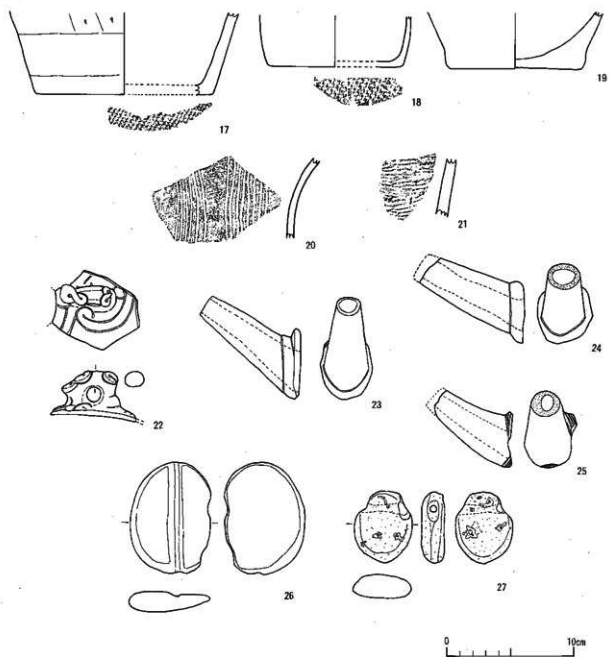


图 4 昭和24年出土遺物(2) (1 : 3)

量に含み茶褐色に呈する。

以上の堀ノ内式併行期のものうち6～8は古い段階に、9～12は新しい段階に位置づけられる。

13～16は後期中葉の加曾利B式併行期に比定される。13は完形のコップ形土器で、浅い沈線によって加曾利B式に特徴的な紐文様が配される。口縁端部の一部に刻み目状の浅い押圧痕があり、その直下に沈線が1条めぐる。胎土に砂粒をあまり含まない薄手の精製土器で、黒灰色を呈する。底に網代痕がある。14もコップ形の土器だが、文様は平行沈線のみである。13に比べ胎土に砂が多く粗製である。底に粗い網代痕がある。15は渦状の突起をもつ浅鉢で、外面に加曾利B式に特徴的な「Q」字状文を配する無文帯と縄文帯をもち、内面に平行沈線文をもつ。黒灰色の精製土器である。16は頸部がくびれる浅鉢で沈線文をもつ。黒灰色の精製土器である。

17～19は底部で、17・18には網代痕がある。17・19は灰白色で砂粒を多く含む。18は暗茶褐色薄手で砂粒を含まない。

20は集合沈線をもつ薄手の土器で、新潟県に類例があり、堀ノ内式の前段階と併行すると考えられる。胎土に砂粒を多量に含み暗茶褐色を呈する。

21は燃りの弱い無節の縄文土器である。砂粒を含み、淡黄灰色を呈する。繊維は含まない。前期の所産か。

22～25は注口土器の把手および注口部である。22は把手に「8」字状の浮文を付す。黒灰色の精製土器である。23～25は注口部で、23・25は基部に沈線文がある。いずれも細砂を含み軟質である。

26は石錘である。偏平な河原石の一面に凹線を抉り縄掛け部としている。黒色砂岩系。重さ85.8g。

27は軽石製の浮子である。偏平な軽石の一端に両側から穴を穿ち縄通しとしている。重さ10.0g。

3 馬場古墳 (図5)

遺跡西方の山麓に、県内最北に位置する古墳が2基あることが知られていたため、発掘に併行して測量調査を行なった。

古墳は千曲川によって浸蝕された約200mの比高をもつ段丘崖の下麓にあり、沖積地との比高約30mを測る。古墳からは眼下に現国道117号線と千曲川を望む。

古墳は段丘崖斜面に並行して2基が心々距離で50m隔てて並ぶ。南西のものが2号墳、北東のものが1号墳と命名されている。現況は2号墳が杉の植林で頂部平坦面に祠が祀られている。1号墳は雑木林である。1号墳から北東へ下ると願成寺に至る。

測量は平板で50cm間隔の等高線を100分の1の縮尺で追った。基準杭は任意の開放トラバースを用いた。レベルはJ R飯山線踏切の303.281mを基準とした。ただし、基準杭に高さをおとす段階で仕事にミスがあり、2号墳の等高線は10cmの位が10cmと60cmの等高線となっている。

1号墳、2号墳ともに地形を最大限に利用して築造されている。基本的には北から南へ傾斜する斜面の高位測を削り出す丘尾切断方式で築造されている。しかし現状を見ればもともと丘陵から切断された高まりをもった地形を若干削り出した可能性が高いと考えている。

両墳とも円形ないし方形に整えようという強い意識はみられない。2号墳は北・西・東斜面が直線的で方墳のようにも見える。しかし北東角は1号墳へ延びる尾根線にあたるために突出して角ばっているのがあり、東・西斜面は直線的な自然地形である。1号墳も正円ではなくいびつな楕円形である。

また両墳ともに墳裾を明瞭にしていない。丘陵高位の西側はかろうじて墳裾が認められる。2号墳は325.5m等高線付近、1号墳は331.10m等高線付近である。しかし丘陵低位側は墳裾が明瞭でなくそのまま自然地形へと続く。ただし墳丘の立面観は量感がある。側面あるいは丘陵低位側から見ると自然地形をも墳丘と見え、こんもりとしている。

墳頂平坦面は、2号墳は祠があるためか13m×10mの明瞭な平坦面がある。盗掘等の跡はない。1号墳は墳頂平坦面が認められない。

墳丘の規模は先述した理由で不明確だが、高位側の裾を参考にすれば、2号墳が南北約25m×東西約20m、高さ約2.9m、1号墳が北東-南西約19m×北西-南東約16m、高さ約2.8mと推定される。

出土遺物の伝承はなく、内部施設も不明である。表面観察からは葦石・埴輪等の外部施設は認められない。

東原遺跡で飯山鉄道敷設の際に、勾玉・管玉・切子玉・直刀などの古墳の副葬品と考えられる遺物が出土している。したがって良好な水田可耕地をもたず、冬季の多雪というきびしい自然条件下にある当地域にも古墳が築造されていたことは確実である。今回測量した馬場古墳も古墳と考えてよいであろう。述べたように県内最北に位置し、きびしい自然条件下にある当地域に古墳文化が波及した証しである馬場古墳は重要な遺産である。

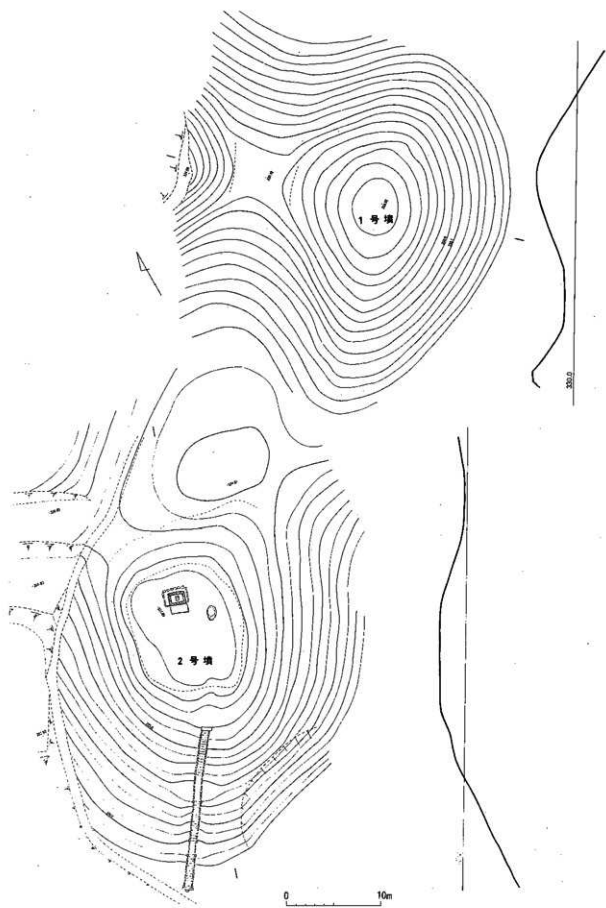


図5 馬場古墳測量図 (1:400)

第4章 発掘調査

1 発掘調査の方法

調査は2か年に分けて行われた。これは用地買収の予算的關係によるものであり、必ずしも効率の良い調査方法とは言えなかった。

グリッドの設定は、国土座標に基づいて設定したが、調査範囲は方位とうまく合致しないために北にあわせて設定することができず、一点の国土座標をおとして任意に設定してすることとした(図6)。

調査は、1から13ラインを平成8年度に発掘調査を行った。また、23ラインから37ラインについては、台地下という事もあって重機により確認調査をする事とした。なお、1～6ラインは東に向かって急崖となっており、黒色土が厚く堆積していたため任意のトレンチを設定し調査した。

14～24ラインは平成9年度事業として実施した。平均2mの粘土層に覆われており、加えて縄文後期面は砂質粘土層の部分が多く、遺構が崩れたり雨水が川となって流れ出したりするなど、そのための排水溝の設置や遺構が崩れて消滅するなど調査は難渋した。

2 遺構

発掘調査によって検出された主な遺構は、竪穴住居址4軒(敷石住居1含む)、土坑87基(含む屋外埋設土器8基)、掘立柱建物址1軒(環状組石炉含む)他である。地殻変動や調査の未熟さもあって不明確な遺構が多い。また、いずれも十分な整理を経ていないために不確定な部分がおおいため、本稿では取り合えず各遺構については表で示していく事とし、文章では簡単に触れていく。なお、今後あらためて整理を行い責を果たしたい。

A 住居址(SI)

調査地区では4軒の住居址を検出したが、そのほかにも住居址と考えられる遺構も存在する。SI3はF-11区を中心として検出されたもので、壁などの立ち上がりは確認できなかったが、中央に炉があり周辺にピットがめぐることから住居址と断定した。SI2は(図15)、敷石住居が崩れたものと判断できるもので、敷石の周辺を小さな平石を直立にして壁のように構築している。SI3はG-15付近において発見されたもので、極めて不明確であった。大型の住居址の可能性はある。なお、G-16においては、その床面より一段下がつて炉をもつ底面が発見されている。これは、別の小型住居と見るべきかは今後の検討課題としておきたい。SI4はE-17付近において発見されたもので、わずかな石組みをもつ炉とその周辺に配置されたピットで構成される。土層の攪乱が見られ明確ではない。

このほかG-18付近においても円形の掘り込み状の部分が見られたが、住居址とする根拠はない。そのほかの地区においても多く見ピットが発見されているので、住居址の可能性もあるが、現在までの整理段階では確定できない。

B 土坑(SK)

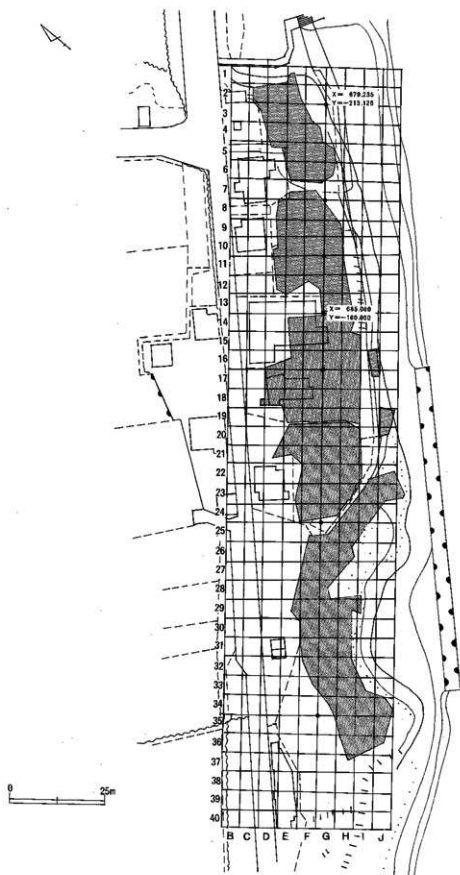


図 6 調査区グリッド設定図 (1 : 500)

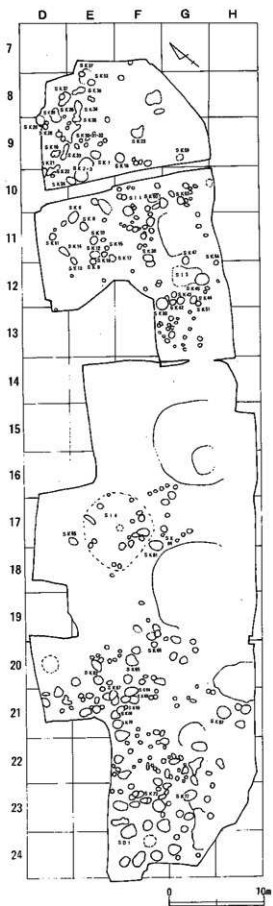


圖 7 主要遺構分布圖 (1 : 250)



图8 遗物分布图(1) (1:100)



図9 遺構分布図(2) (1 : 100)

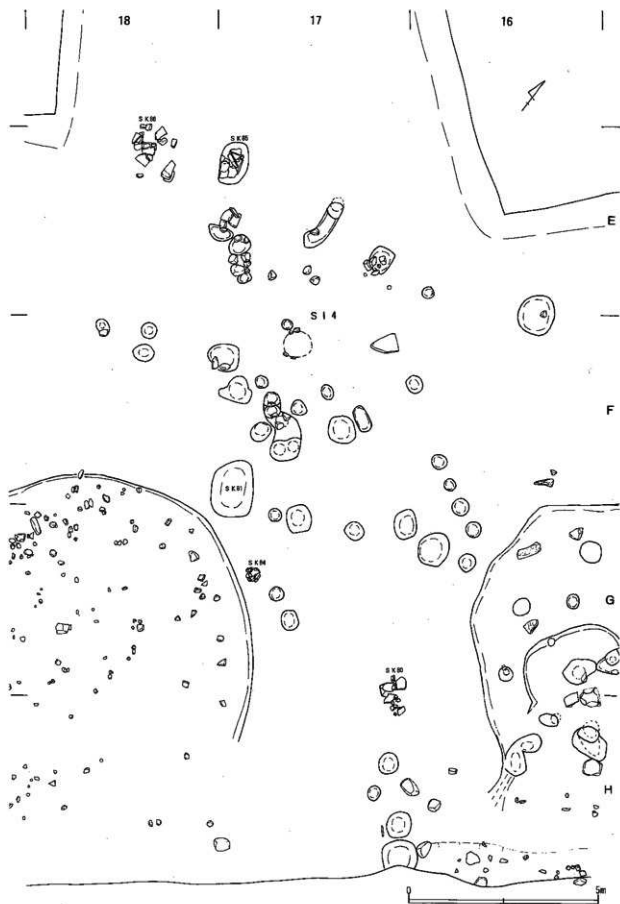


图10 遺構分布图(3) (1 : 100)

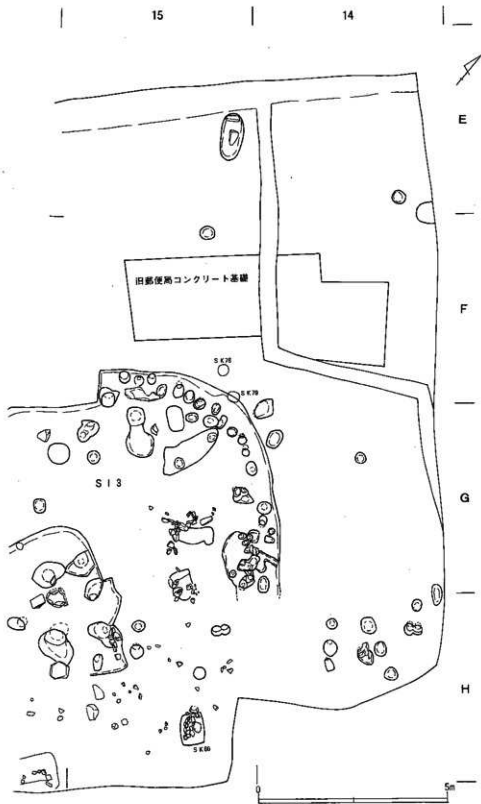


図11 遺構分布図(4) (1 : 100)

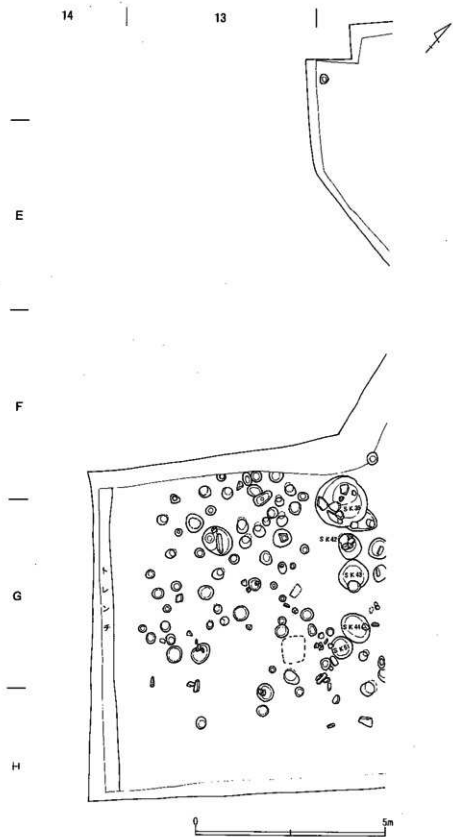


图12 遺構分布図(5) (1:100)



図13 遺構分布図(6) (1 : 100)



图14 遺構分布図(7) (1:100)

土坑は87基発見されている。この中には配石墓や屋外土器埋設土坑（埋設土器）なども含めており、また、いくつかはピットも含まれるものと考えられる。配石墓はSK12・59（図18・23）で、いずれも一部破壊されており良好な遺存状況ではない。SK12は側石がほとんどないが底面の敷石が残っている。この地区はかつて削土された形跡があり、その折に破壊されたものと考えられる。SK59は、一部別遺構により破壊されているが、北端部壁には平石が組まれている。

屋外土器埋設土坑は合計8基発見されている。いずれも粗製の深鉢が埋設されている。綾杉状沈線土器も出土しており、全体的には加曾利B式併行期と考えられる。なお、SK66・83（図27）などに代表されるように斜めになって出土しているものがある。これらは、埋設後地殻変動のズレによって生じたものと考えられ、土層のズレ事象としてとらえられる。

C 配石遺構（SH）

調査区（遺跡内）のいたるところに石が運び込まれており、石だけで群をなすものやピット内及び周辺に石が使用されているものがある。このうち石が群をなしている地区2か所を配石遺構と考えて報告するものである。SH1はD-8区を中心に検出されたもので土坑上に構築されたものと考えられる。主に平石（鉄平石）である。SH2はG-9区を中心した石の群である。いずれも土器破片や石器などが出土している。そのほかG-19区でもまとまっている。

D 建物址（SB）

F-23区の環状組石炉の覆屋と考えられる建物址がある（図30）。このうちP₁とP₂内より柱痕がそれぞれ出土している。P₂内出土例は径24cm、P₁から出土した柱は径35cmを測る。いずれもクリ材である。E-20・21区においても大型の掘立建物址が予想される。

E 環状組石炉（図30・31）

F-23区において出土した炉である。径135cmを測るほぼ円形の石組みの炉である。石の組み方は三重になっており、外側には平石を立てて周囲と区画し、次に平石を水平に並べ、中側は人頭大の石を並べて規則正しく構築している。炉内部は最上層が炭化物、その下層に焼土が充填している。炭の層には多量の獣骨が混じる。なお、南側に石組みが認められないが、これは重機によっては取り除かれたものか、なかったものか判断としないが、おそらく一部壊された形跡があるものの全周を石組みがめぐっていたようではないと判断される。

この石組みは180cmもの粘土層によって覆われており、検出された石組みの、当時地表に現れていたと考えられる部分の石上部は粘土に覆われていた。すなわち、使用していた時期に粘土に覆われたと推定することができ、実際に重機で除去している時も、粘土層を除去しているという判断で行っていたらしい。したがって、この組石炉は遺跡が存続している最終時期に使用されていた事が伺え、災害による粘土層によってバックされる寸前まで機能を果たしていた事になる。

本遺跡が地震災害により水没し、その結果土層にズレが生じたことについては早津賢二先生をはじめとして多くの方にご教授いただいたが、整理未了のため本報告では記すことができず、関係者におわびします。

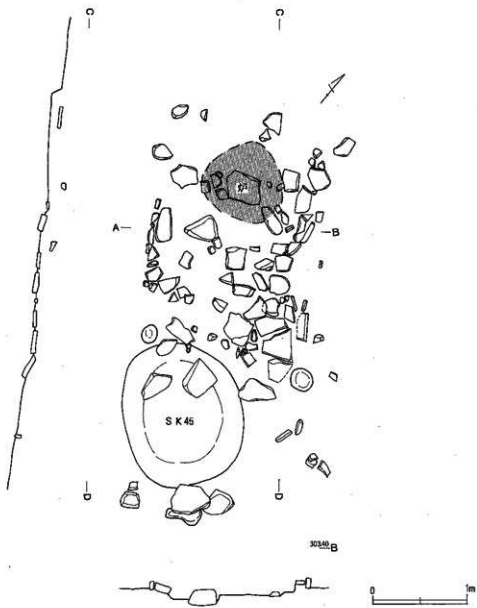


图15 1号墩石住居址 (1:40)

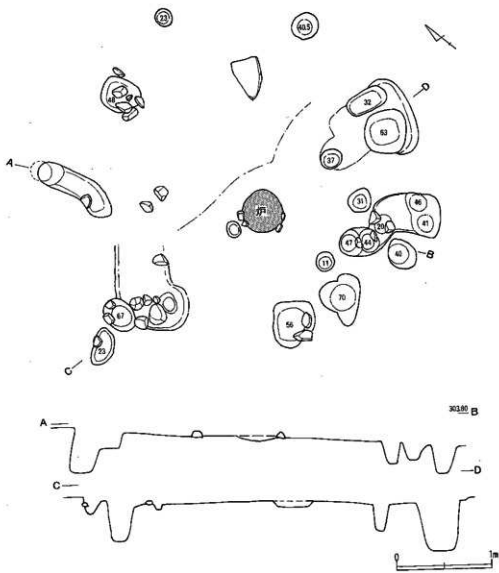


図16 3号竪穴住居址 (1:40)
(ピット内数字は深さ)

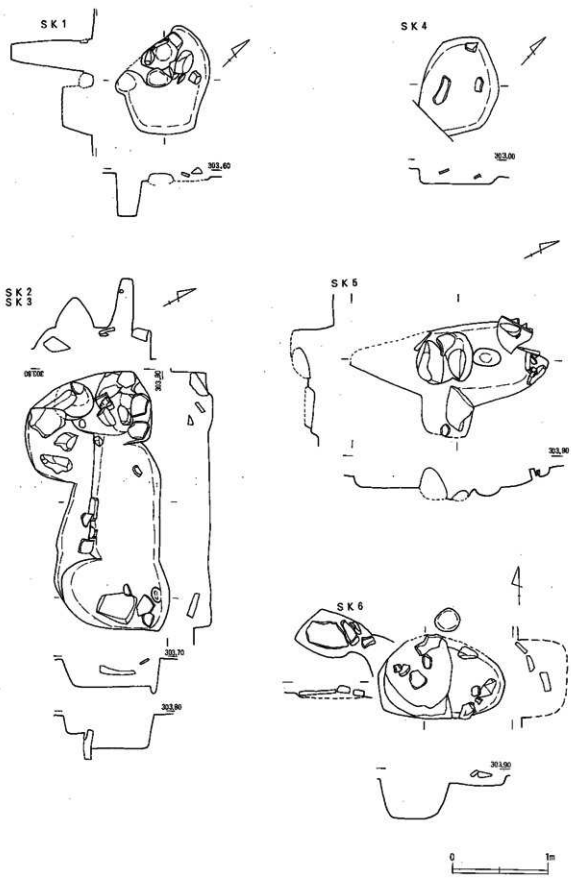


图17 土坑(1) (1:40)

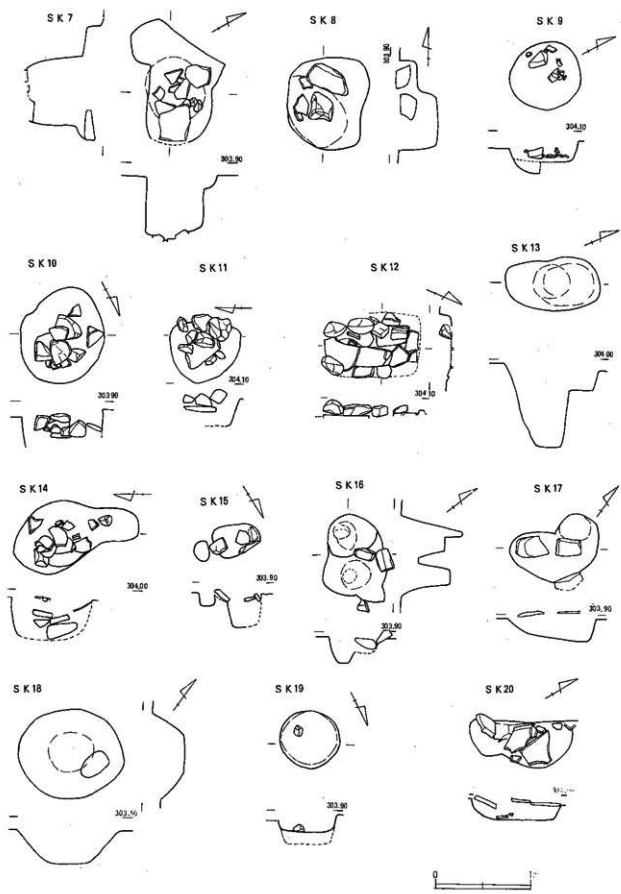


圖 18 土坑 (2) (1 : 40)

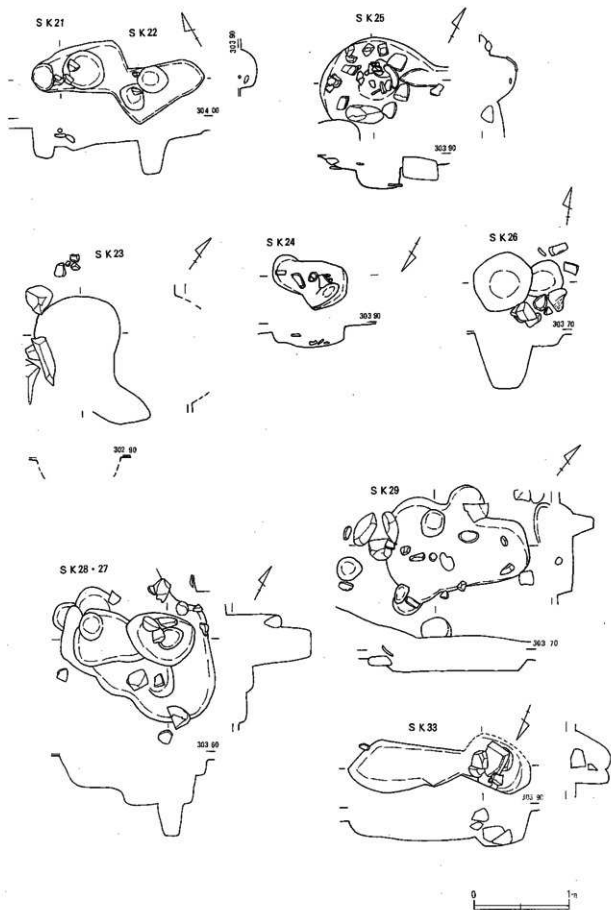


圖19 土坑(3) (1:40)

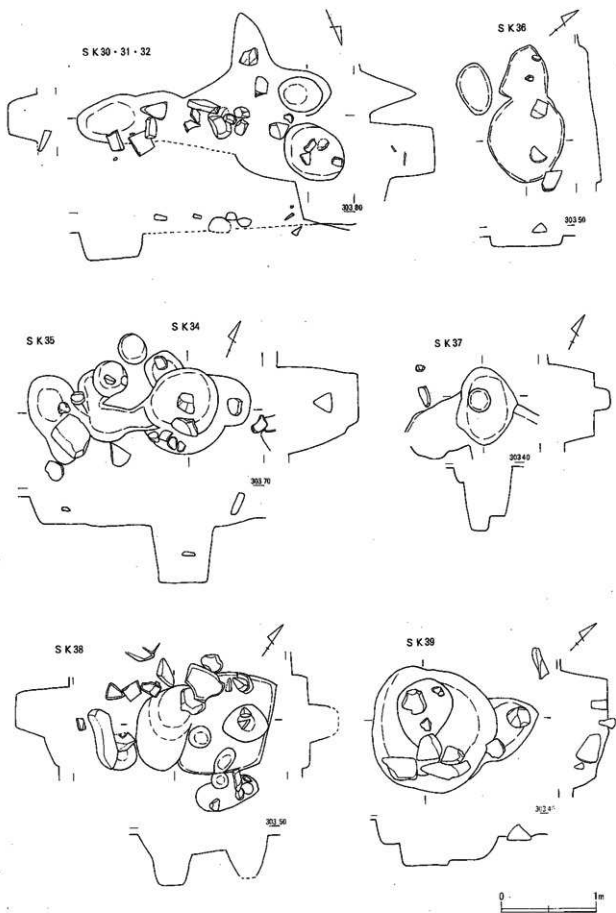


图 20 土坑 (4) (1 : 40)

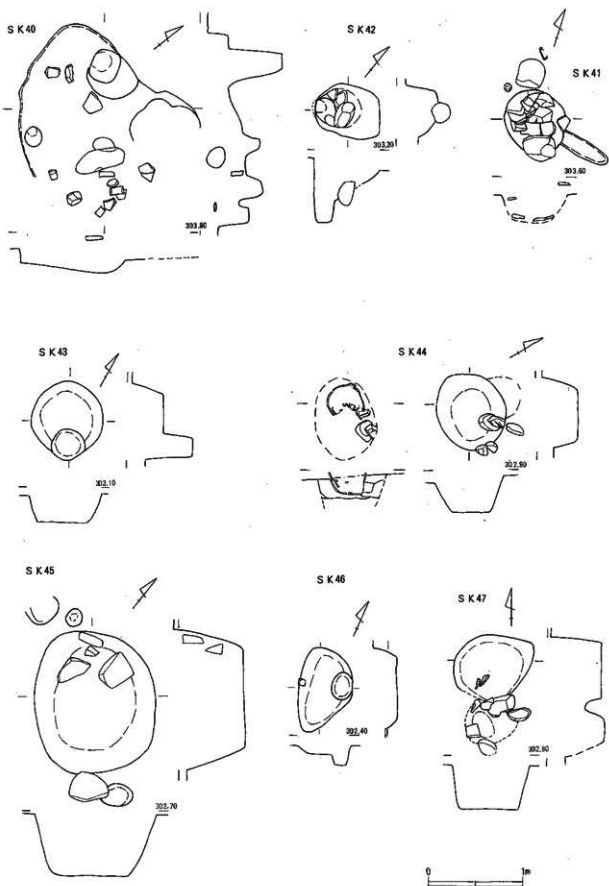


图21 土坑(5) (1:40)

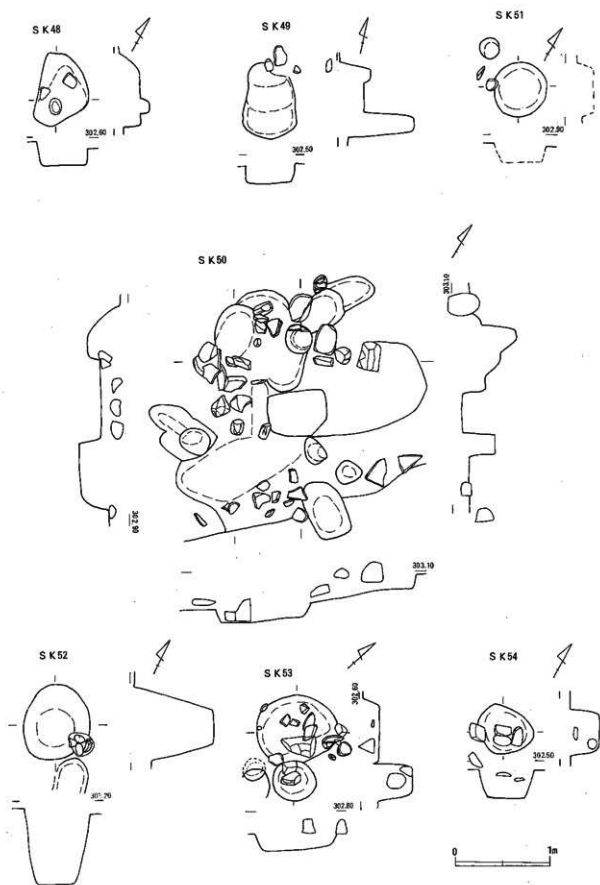


图22 土坑(6) (1:40)

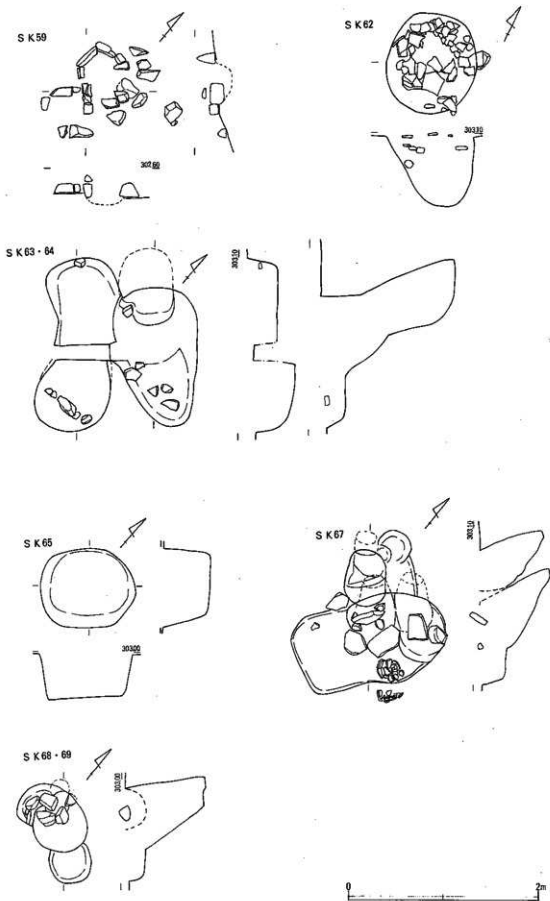


圖23 土坑(7) (1:40)

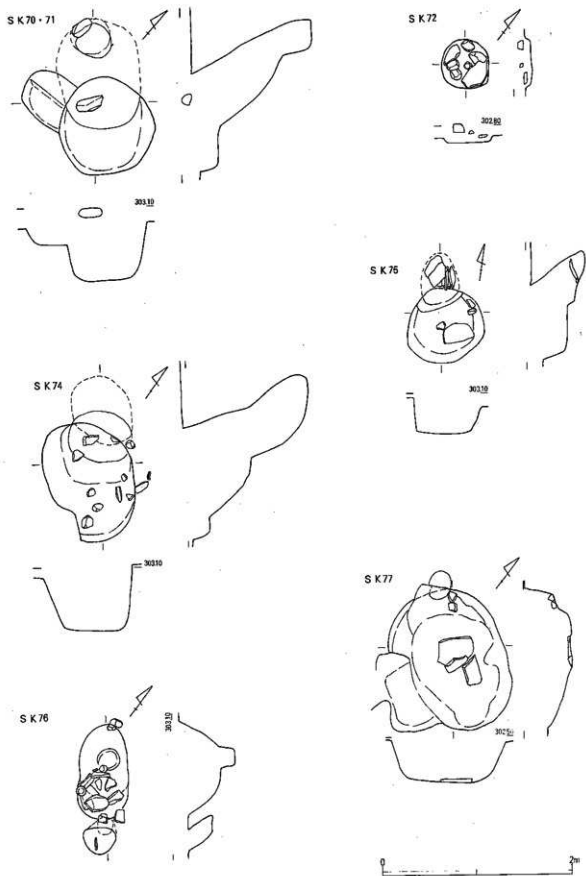


图24 土坑(8) (1:40)

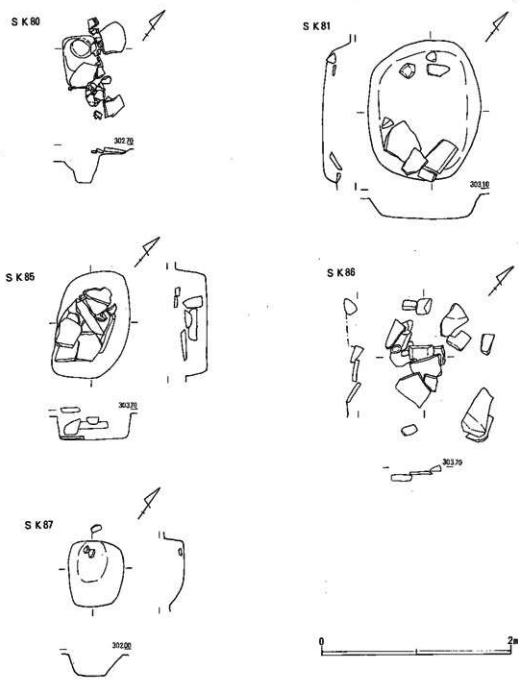
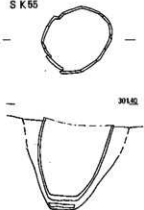


圖25 土坑(9) (1:40)

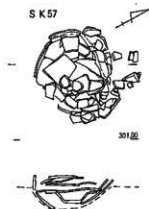
S K 55



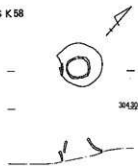
S K 56



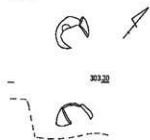
S K 57



S K 58



S K 61



S K 60

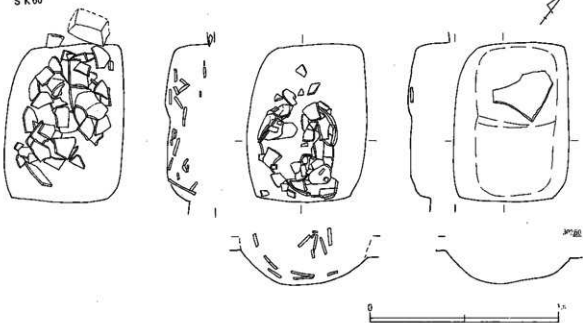


图 26 土坑 (仰) (1:20)

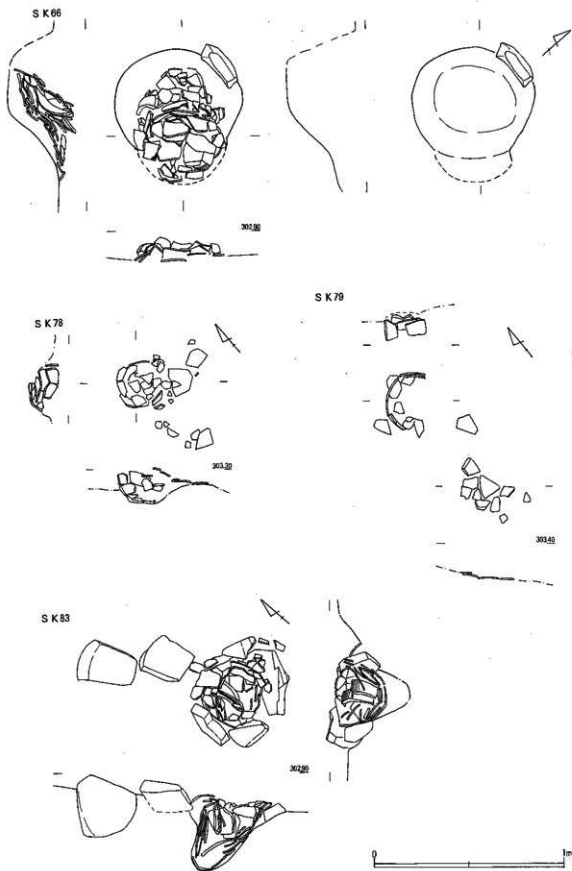


图27 土坑 (1) (1 : 20)

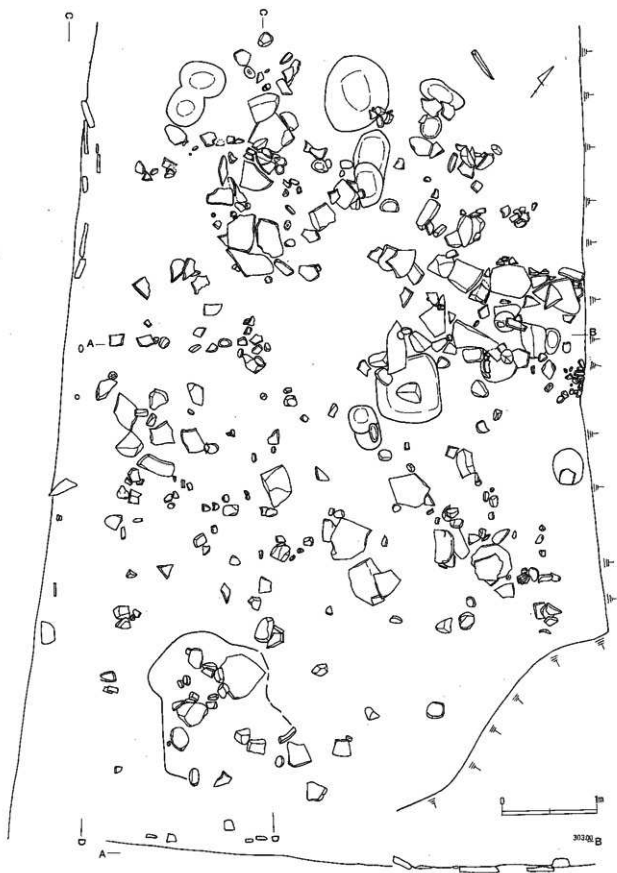


图28 1号配石遺構 (SH1) (1:40)

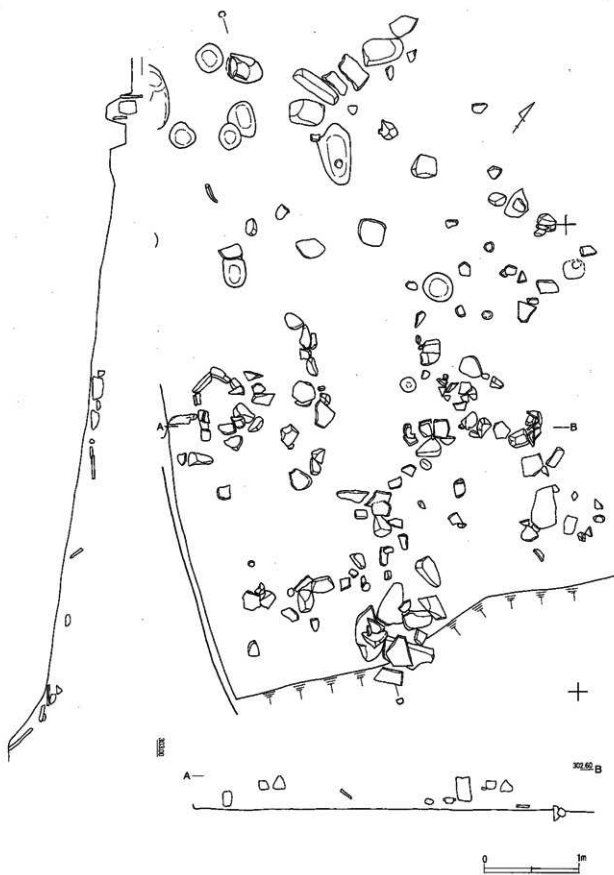


图29 2号配石遺構 (SH2) (1:40)

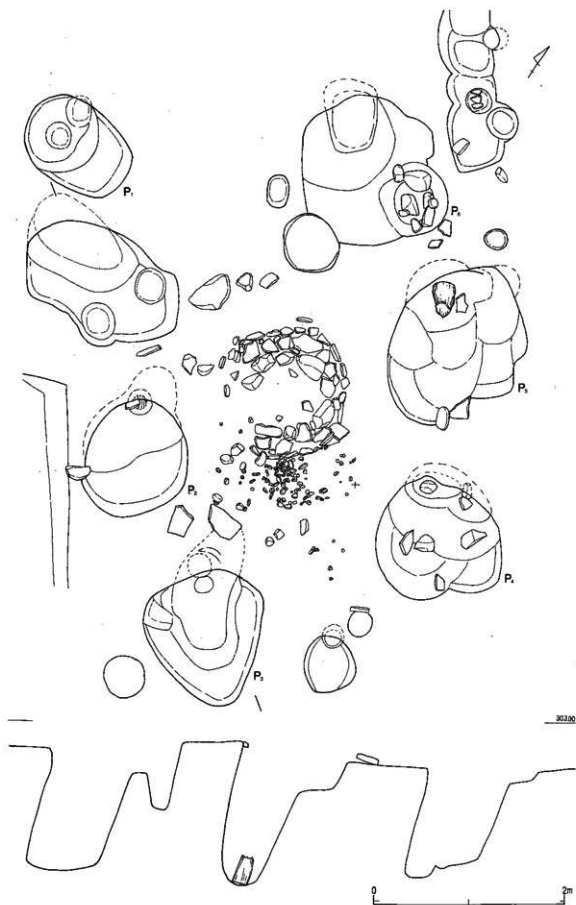


图30 掘立柱建物址 (SB1) (1:40)

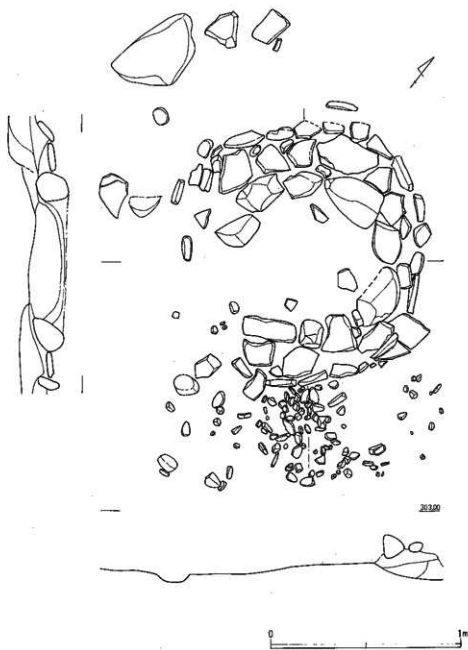


图31 環状組石炉 (1 : 20)

東原遺跡遺構一覽

住居址 SI
 土坑 SK 配石墓・土器埋設土坑含む
 配石 SH

略号	遺構名称	所在グリット	形態・規模	備考
SI 1	1号竪穴住居址	F-10・11	_____	
SI 2	1号敷石住居址	G-12	_____	
SI 3	2号竪穴住居址	G-16	_____	
SI 4	3号竪穴住居址	E-17	_____	
SK 1	1号土坑	E-9	不整楕円形 115×98	
SK 2	2号土坑	E-9・10	楕円形 140×90	磨石
SK 3	3号土坑	E-9・10	楕円形 192×117	
SK 4	4号土坑	E-10	楕円形 100×80	
SK 5	5号土坑	E-10	不整楕円形 210×120	
SK 6	6号土坑	E-10・11	楕円形 135×90	
SK 7	7号土坑	E-9	楕円形 130×80	石鏃・打製石斧
SK 8	8号土坑	E-11	楕円形 98×84	
SK 9	9号土坑	E-11	不整円形 75×72	
SK 10	10号土坑	E-11	楕円形 100×88	
SK 11	11号土坑	D-11	不整円形 75×72	敷石
SK 12	1号配石墓	E-11	長方形 100×70	
SK 13	13号土坑	E-11	楕円形 100×56	
SK 14	14号土坑	D-11	不整楕円形 127×77	
SK 15	15号土坑	E-11	楕円形 50×34	
SK 16	16号土坑	D-9	楕円形 85×77	
SK 17	17号土坑	E・F-11	不整楕円形 92×67	
SK 18	18号土坑	F-9	円形 110×95	
SK 19	19号土坑	E-11	円形 65×60	
SK 20	20号土坑	D-10	不整楕円形 108×47	
SK 21	21号土坑	D-9・10	楕円形 100×45	
SK 22	22号土坑	D-9・10	楕円形 92×53	
SK 23	23号土坑	F-9	不整楕円形 155×95	
SK 24	24号土坑	E-10	不整楕円形 78×52	
SK 25	1号埋設土器	D-8・9	不整楕円形 123×88	
SK 26	26号土坑	D-9	円形 65×62	
SK 27	27号土坑	D-8	楕円形 74×53	

表2 遺構一覽(1)

略号	遺構名称	所在グリット	形態・規模	備考
SK28	28号土坑	D-8	楕円形 65×60	石鍬
SK29	29号土坑	D-8	不整楕円形 155×120	
SK30	30号土坑	D・E-9	楕円形 70×55	
SK31	31号土坑	D・E-9	楕円形 45×35	
SK32	32号土坑	D・E-9	楕円形 75×55	
SK33	33号土坑	D・E-9	不整楕円形 193×55	
SK34	34号土坑	E-8	不整円形 80×70	戴石
SK35	35号土坑	E-8	楕円形 95×62	
SK36	36号土坑	E-8	不整楕円形 145×80	
SK37	37号土坑	E-7	楕円形 83×67	
SK38	38号土坑	F-11・12	楕円形 140×105	石鍬
SK39	39号土坑	F・G-12	不整円形 133×130	
SK40	40号土坑	F-12	楕円形 170×160	
SK41	41号土坑	F-12	楕円形 70×60	
SK42	42号土坑	G-12	楕円形 70×55	
SK43	43号土坑	G-12	円形 85×75	
SK44	2号埋設土器	G-12	円形 80×75	
SK45	45号土坑	G-12	楕円形 150×125	
SK46	46号土坑	G-11	楕円形 90×55	
SK47	47号土坑	G-11	楕円形 90×75	
SK48	48号土坑	G-11	楕円形 78×53	
SK49	49号土坑	G-11	楕円形 82×56	
SK50	50号土坑	F・G-10	不整楕円形 285×235	戴石
SK51	51号土坑	G-12	円形 55×55	
SK52	52号土坑	E-8	楕円形 80×70	
SK53	53号土坑	G-10	楕円形 90×75	
SK54	54号土坑	H-11・12	不整円形 60×55	
SK55	3号埋設土器	E-3	円形 37×36	
SK56	4号埋設土器	F-7	—————	
SK57	5号埋設土器	G-10	円形 45×43	
SK58	6号埋設土器	D-12	—————	
SK59	2号配石墓	G-9	楕円形 10×60	
SK60	7号埋設土器	H-15	長方形 83×61	
SK61	8号埋設土器	D-19	—————	鉢型土器

表3 遺構一覽(2)

略号	遺構名称	所在グリット	形態・規模	備考
SK62	62号土坑	E-20	円形 105×95	
SK63	63号土坑	F-21	楕円形 180×80	磨製石斧
SK64	64号土坑	F-20・21	楕円形 145×85	
SK65	65号土坑	F-20	楕円形 100×83	
SK66	9号埋設土器	F・G-20	円形 76×75	
SK67	67号土坑	E・F-20・21	楕円形 160×95	磨製石斧
SK68	68号土坑	F-21	楕円形 80×55	磨石
SK69	69号土坑	F-21	楕円形 45×40	
SK70	70号土坑	E・F-21	円形 104×95	くぼみ石
SK71	71号土坑	E・F-21	楕円形 50×50	
SK72	72号土坑	F-23	円形 52×50	蔽石
SK73	73号土坑	G-22・23		
SK74	74号土坑	E-21	楕円形 125×95	
SK75	75号土坑	E-21	不整円形 83×80	磨製石斧・石鏃
SK76	76号土坑	E・F-20	楕円形 100×55	
SK77	77号土坑	G-23	楕円形 163×135	
SK78	10号埋設土器	F-15	円形 26×25	
SK79	11号埋設土器	F-15		
SK80	80号土坑	G・H-17	長方形 55×40	浅鉢
SK81	81号土坑	F・G-17・18	楕円形 150×120	鉢型土器・石鏃
SK83	12号埋設土器	F-19	円形 50×50	
SK84	13号埋設土器	G-17		
SK85	85号土坑	E-17	楕円形 110×75	
SK86	86号土坑	E-18		
SK87	87号土坑	H-21	長方形 70×60	

表4 遺構一覧(3)

3 遺物

A 土器

今回報告する土器は、多量に出土した土器のごく一部で、完形ないしそれに近く復元できたものの中で図化し得たもののみである。いずれも縄文時代後期のものである。

1・2は後期前葉の胴ノ内式併行期に比定される。1は大型の深鉢で、推定6か所の頂部をもつ波状D縁を呈し、外反する頸部と丸味を帯びた胴部をもつ。D縁部から胴中半にかけて太い沈線文を充填する。D縁部は屈曲肥厚し、中央に一条の沈線文をめぐらし、波状頂部に渦巻文と括弧状文を配する。一条の沈線文の上下には刻み目文を配するが、上下に羽状に配する部分（図示していない）と、下部にのみ配する部分がある。頸部から胴上半にかけては、数条の沈線による垂下文と連続三角形文をめぐらし、その間に弧状文を同心円文になるようにうめている。黒灰色を呈し、焼きの堅い土器である。外面には煤が付着する。内面はミガかれて平滑である。

2は小型の鉢で、沈線文と縄文を配する。D縁部文様は4単位とも等しいが、胴部文様は垂下文およびその間に配される「X」状文両者とも少しずつ文様が異なる。縄文についても充填しない所がある。黒灰色を呈し、外面に煤が付着する。底部はケズられている。

3～11は後期中葉の加曾利B式土器併行期に比定される土器である。

3～5は屈曲して垂直に立ちあがるD縁部をもつ浅鉢である。D縁部および屈曲部に沈線をめぐらし、縄文および、加曾利B式に通用の文様を配する。3は胴上半にも沈線による羽状文を配している。内外面ともにミガキが施され、底部には網代痕が残る。

6・7は黒灰色を呈する薄手の浅鉢である。いずれも平面形が三角形状で、D縁は短く内側に屈曲し、わずかに波状を呈する。6は波状裾部に円形の隆起を配するが、頂部は欠けており不明。7はD縁端に刻み目をめぐらせ波状頂部に渦巻状の隆起文を配する。いずれも内面に沈線と縄文からなる文様帯をめぐらし、波状D縁に対応する位置に沈線による括弧文等を配している。内外面ともにいねいにミガかれ平滑である。底部には網代痕が残る。

8～10は無文の浅鉢である。6・7に比べると粗製品である。8は、頸部がくびれ、9はD縁端に4か所の波状突起をもつ。いずれも内外面ともミガかれるが、6・7ほどといねいではない。底部は網代痕が残る。

11はD縁内面に沈線による文様帯がめぐる浅鉢である。2条の沈線の間に同心円文を4か所配し、その間に四角形文を配する。器壁の剥離が著しいが、全面ミガかれていると推定される。底部は網代痕が残る。

12～14は注口土器である。12は沈線で画された刻み目文帯をめぐらすものである。D縁頂部に4か所の突起をもち、頸部はややふくらみ、ひさご形の糸轡を引く。文様は注口を中心に左右略対称形に配されるが、細部で少し異なっている。

13は頸部が直線的に外傾し、扁平な胴部をもつものである。D縁頂部に2か所のドーナツ形の突起をもつ。胴上半は、沈線というよりむしろ縁を画するかのような技法で画された低い隆起帯による文様がめぐる。

14は、平面形が六角形の特異な胴部をもつものである。D縁は筒状に長くのび、頸部に1条の突帯がめぐる。胴部はそばん玉状で、屈曲部の6か所を突出させ平面六角形にしている。形は特異だが、12・13に比べやや粗製の感がある。

以上図示した後期の土器の他に、前期前葉、中期後葉～後期の良好な資料となる土器が多量にある。層位発掘の資料も一部あり、特に中期後葉から後期にかけての資料は充実している。今回図示できなかったものについても何らかの形で公開していきたい。

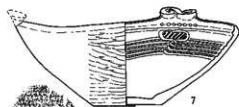
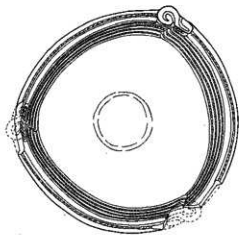
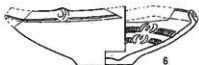
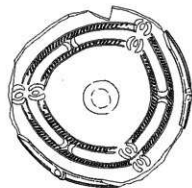
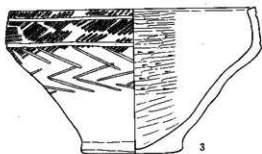
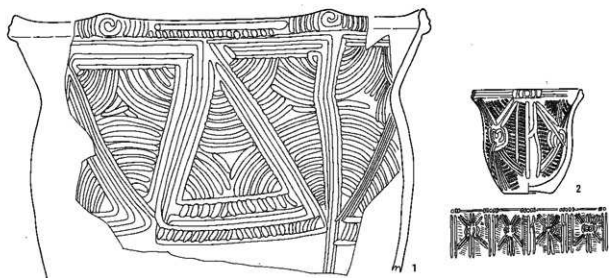


图32 土器(1) (1:4)

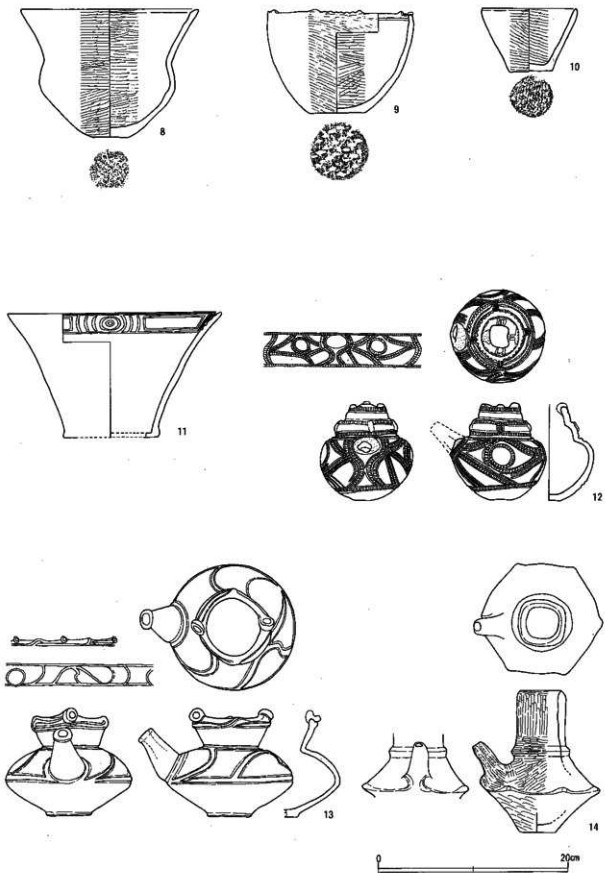


图33 土器(2) (1:4)

B 石器・石製品 (図34~59・61)

検出された石器・石製品には、磨製石斧・石槍・石匙・石錐・石鏃・打製石斧・打製石器・くほみ石・たたき石・磨石・石皿・砥石・石錘・浮子・石棒等がある。その数は膨大であり集計できていないが、数千点に及ぶものと思われる。

以下に各器種ごとに概略説明する。

1 磨製石斧 (1~45)

欠損品が多い。15及び30などは欠損後磨石として使用された形跡が認められる。また、39~45の小型の一群は別の用途が考えられる。

2 石槍 (46~48)

46は明らかに石槍と考えられる。47・48は石鏃のやや大型化したものとも考えられるが、形態からやはり石槍に含める事とする。

3 石匙 (49)

小型品であるが、端部につまみ部を作り出している。本遺跡では唯一であった。

4 石錐 (50~99)

石錐は(1)明瞭につまみ部をもつもの (50~60など)、(2)棒状のもの (72~94)、(3)不安定な形態のもの (95~99) などに分類される。出土品のほぼすべてを図化している。材質はほとんど安山岩であるが、チャートもある。黒曜石はごくまれに使われる (64・78)。

5 石鏃 (100~219)

石鏃は全体では200点を越えると思われる。未製品もしくは失敗品と考えられるもの (100~105) もあるが、基本的には有茎 (106~141)、無茎 (142~219) のものに大別される。全体では1/4が有茎石鏃で、他は無茎石鏃で、圧倒的に無茎石鏃が優位となっている。なお、無茎石鏃はやや大型で粗製のなもの (142~150) や極めて小型のもの (208~219) など大きさで分別できる要素もあり、これらが対象物の違いを反映している可能性もある。

材質は安山岩が圧倒的であるが、黒曜石も一定量使われ、チャートなども少し使われる。

6 打製石斧 (220~248)

打製石斧も数多く出土しておりその一部を図示した。形態的にはいろいろなバラエティーがあるが、規格的に分類はできない。なお、221・222は片刃石斧でありその存在が目立つ。

7 打製石器 (249~266)

剥片の一部を加工して作り出した石器には、スクレイパーや横刃形石器などさまざまな呼称がつけられている。本遺跡出土石器もこのような剥片石器が数多く出土している。本稿にはごく一部の掲載にとどまっている。縦長の剥片の縁辺に加工を施したスクレイパー的機能をもつもの (252・263など)、横刃状のもの

の(251・253・256など)、ノッチ状のもの(254・260など)などがある。

8 くぼみ石・敲石・磨石(267~364)

あわせて約100点出土しており、ほぼすべてを図化した。くぼみと磨石の両機能をもつものが多い。

9 石皿(365~370)

すべて欠損品であるが、計6点出土している。367は脚のついた石皿で、掻き出し口も広く作られている。369は一部欠損するが形の整った優品である。

10 砥石(371~375)

いずれも溝が使用痕として残っている。合計5点出土している。

11 石錘(376・377)

2点のみの出土である。擦切石錘と呼ばれる特徴的な石錘である。諏訪地方に特徴的なものとされ、北信濃地方では初めての出土かもしれない。

12 浮子(378~384)

378・379は一端のほぼ中央に孔が開けられている。378は千葉県加曾利貝塚出土例に似る。380~384は欠損しているが、整形されている面が認められ同様な形をとるものであろう。385は2孔認められる。386・387は孔は認められないが浮子としておく。いずれも軽石製(テイスイト)である。

13 石棒(388~392)

378・389は頭部破片で、388はせ石剣にも似るが、断面がほぼ円形である事から石棒としておく。

14 その他(図61-24・393)

24は滑石製の小型玉である。首飾りの一種であろう。393はミニチュアの石皿である。大きさから実用品とは思われない。

C 土偶・土製品

1 土偶(図60-1~図61-18)

調査区内の土器廃棄場所及び遺構内より計18点出土している。10は環状組石炉の東1mより出土したものである。17・18はハート形土偶(郷原タイプ)の典型的なもので、推定30cm以上的大型土偶になる。

2 土製品(図61・19~23)

19~22はいわゆる耳飾りである。21・22は耳とうと呼ばれるものであろう。23は不明であるが、あるいは耳飾りの一種かもしれない。

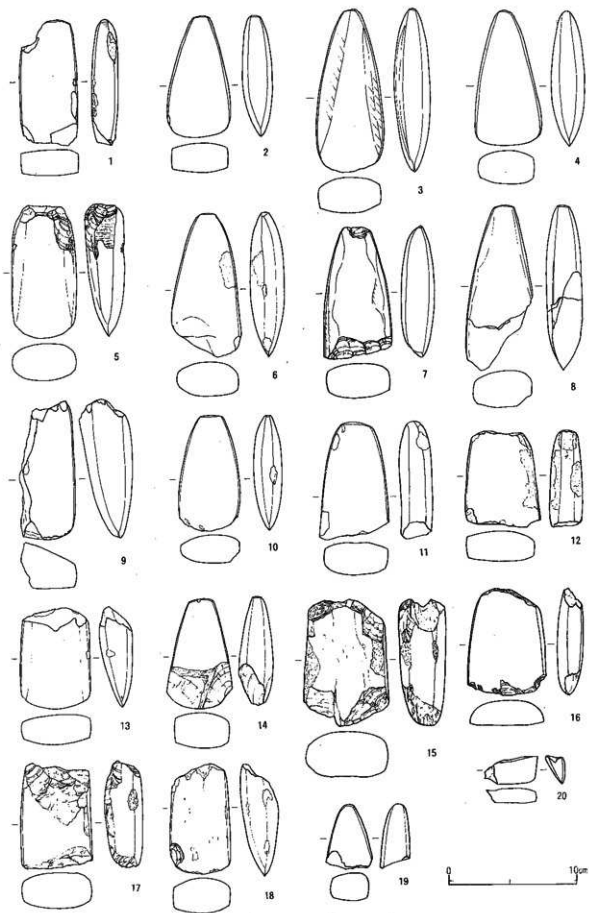


图34 石器(1) (1:3)

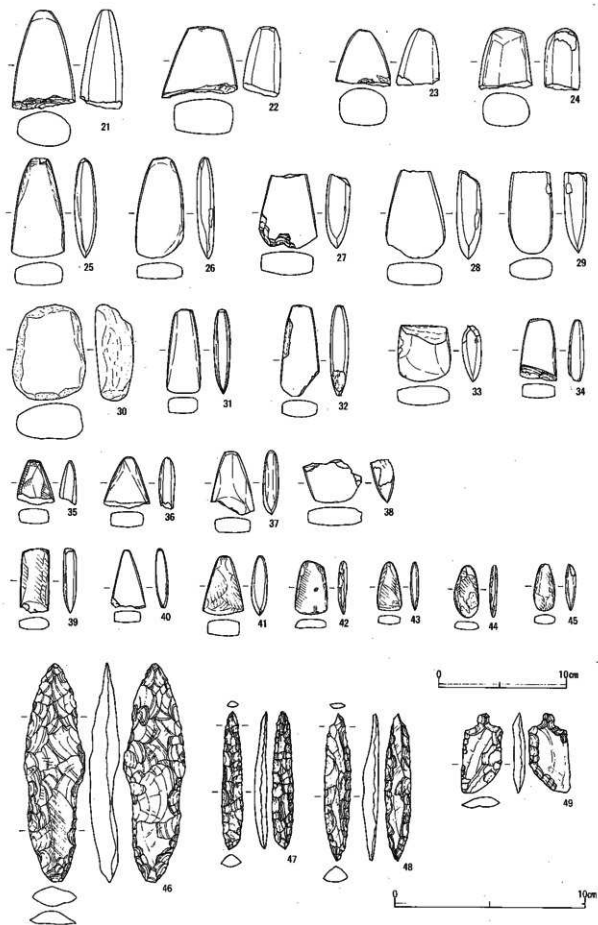


图35 石器(2) (1:3, 1:2)

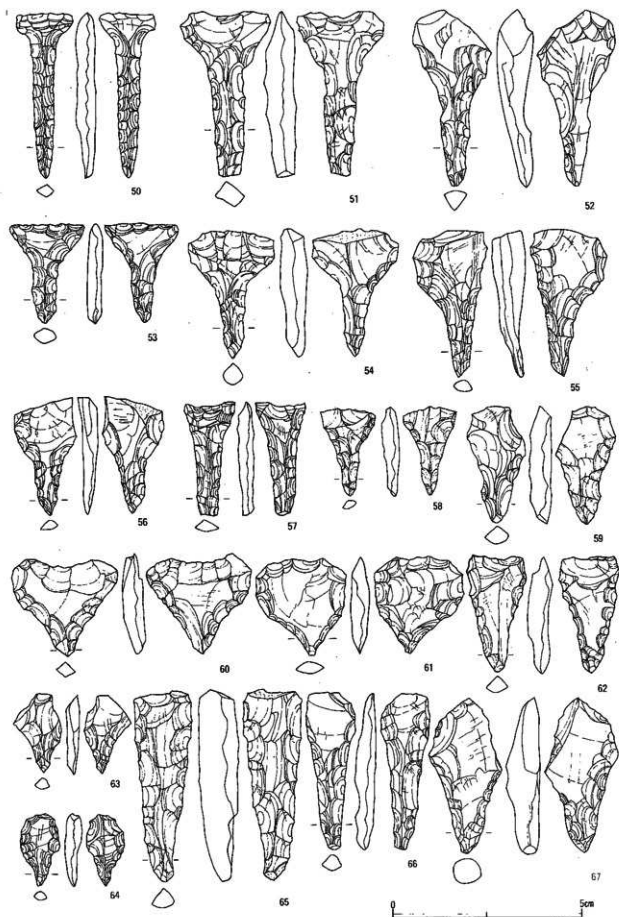


图36 石器(3) (1:1)

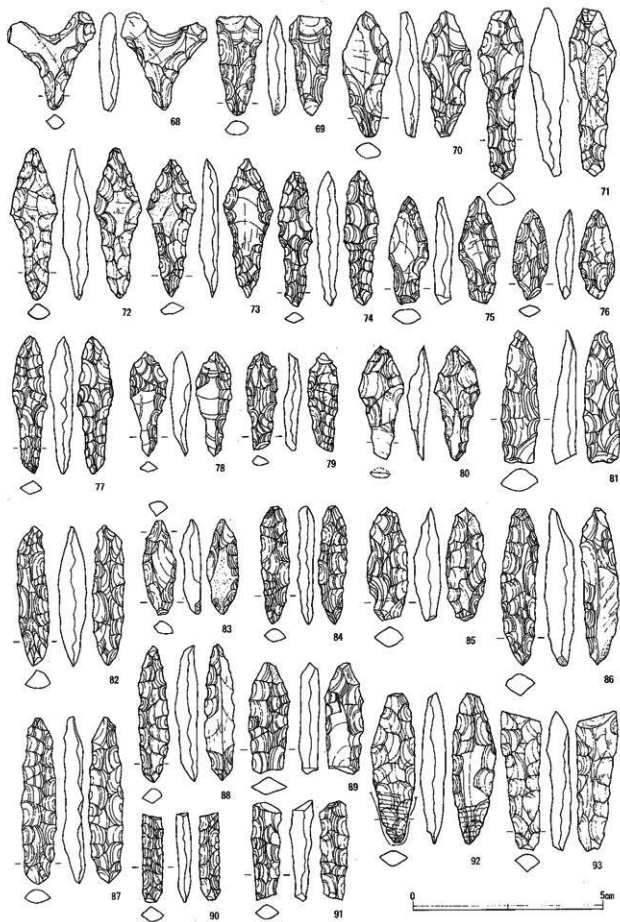


圖37 石器(4) (1:1)

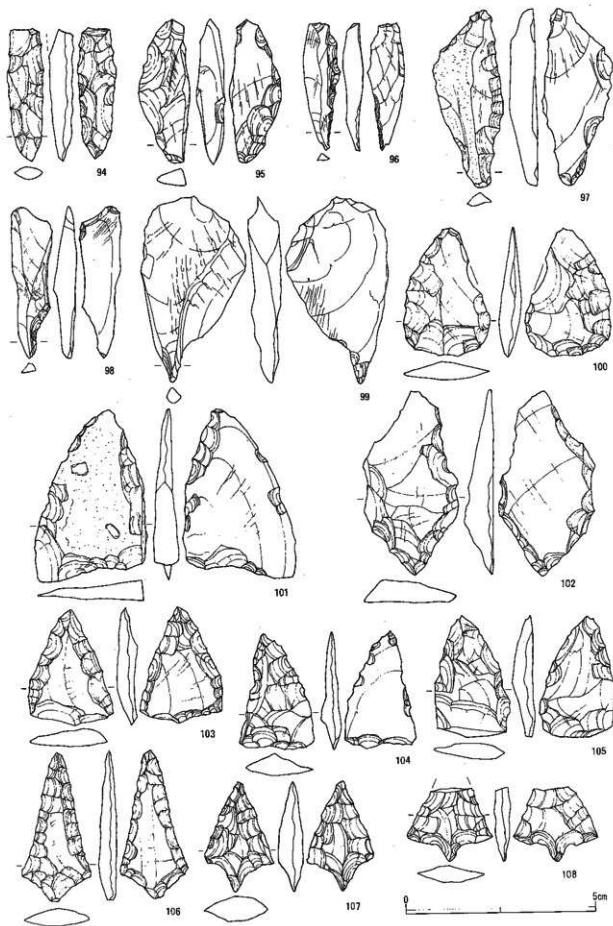


图38 石器(5) (1:1)

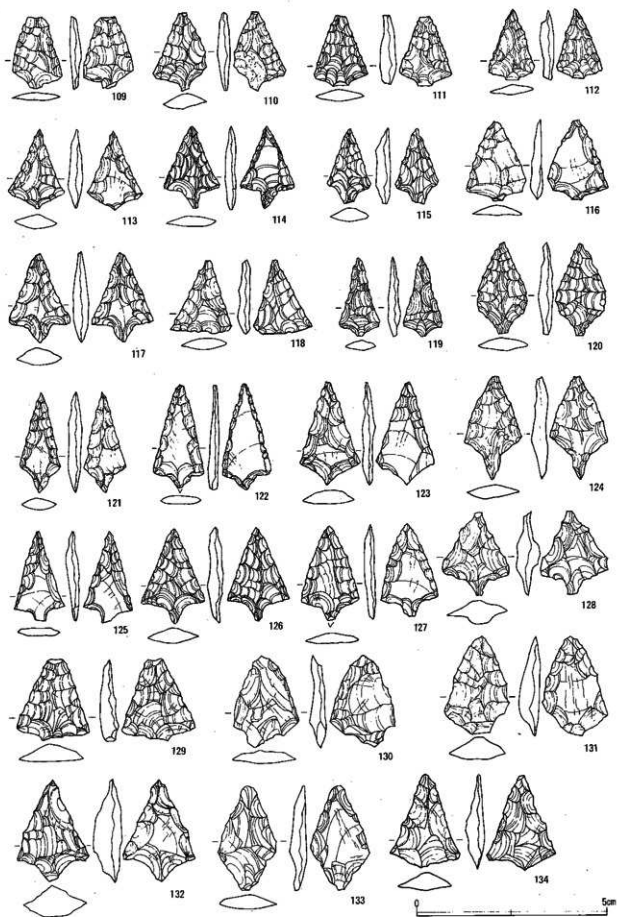


图39 石器(6) (1:1)

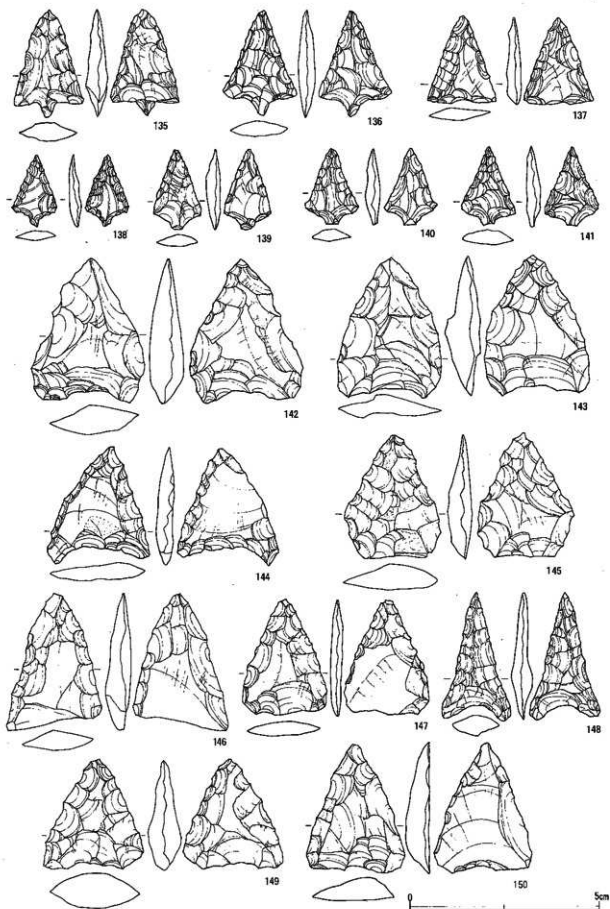


圖40 石器(7) (1:1)

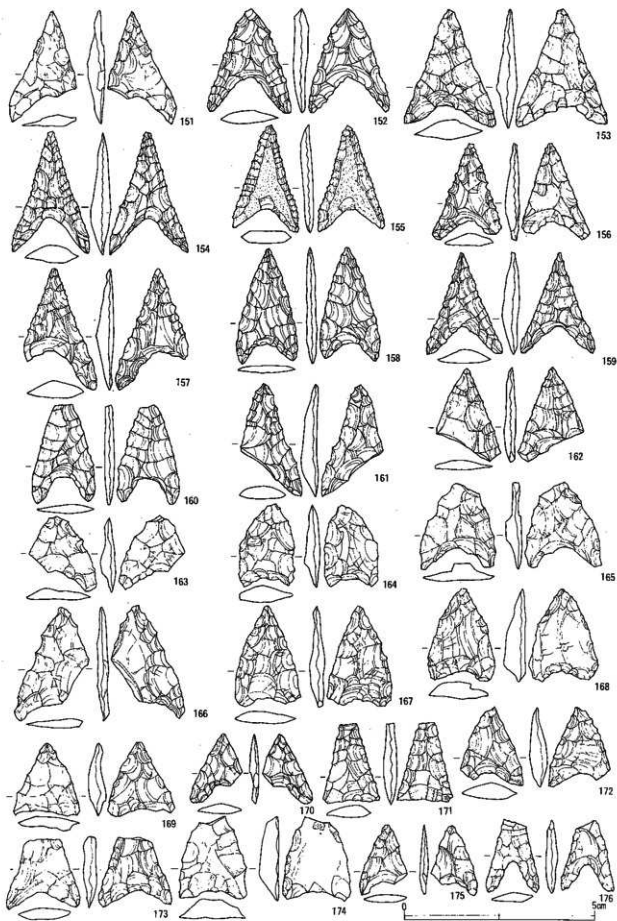


圖41 石器(8) (1:1)

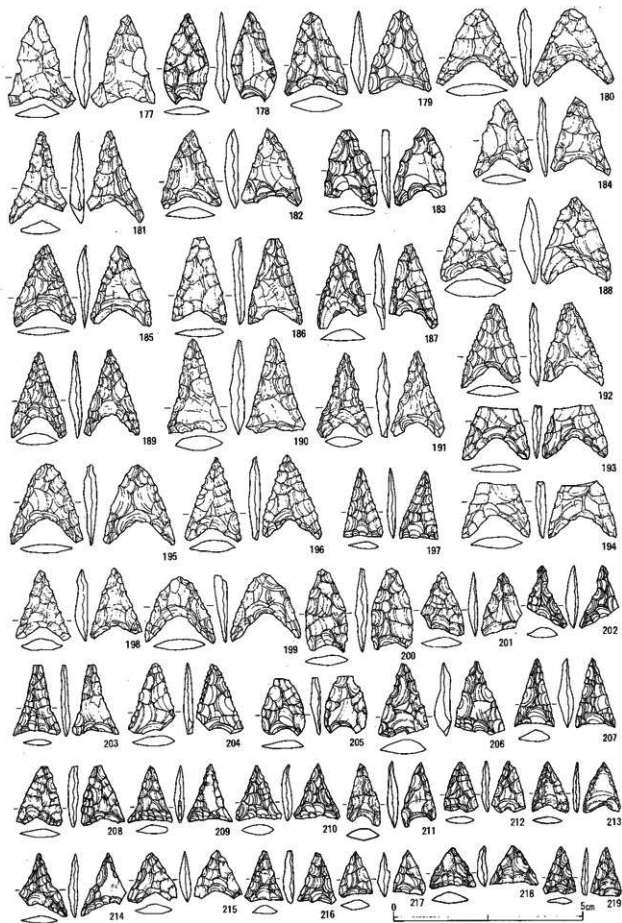


图42 石器(9) (1:1)

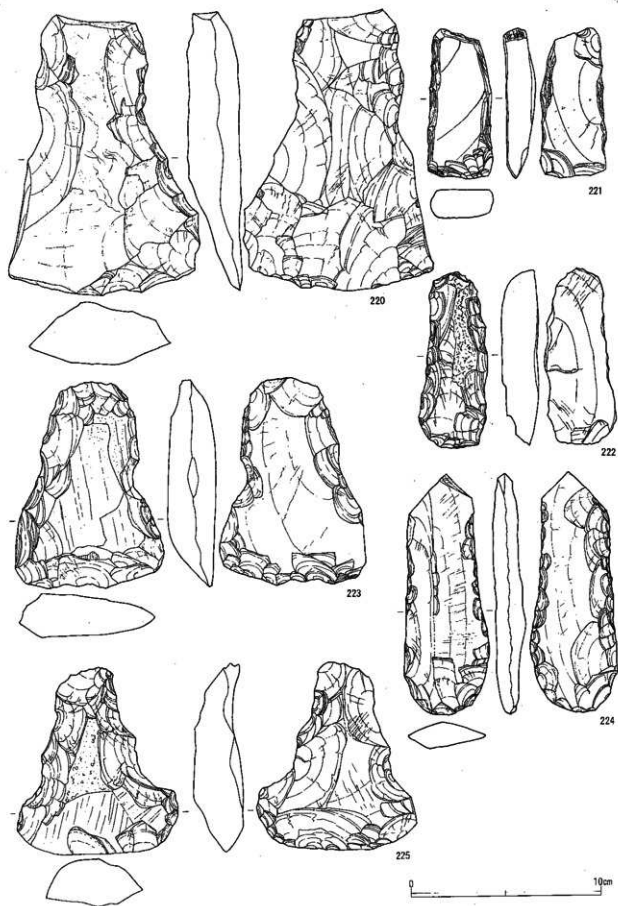


圖43 石器(0) (1:2)

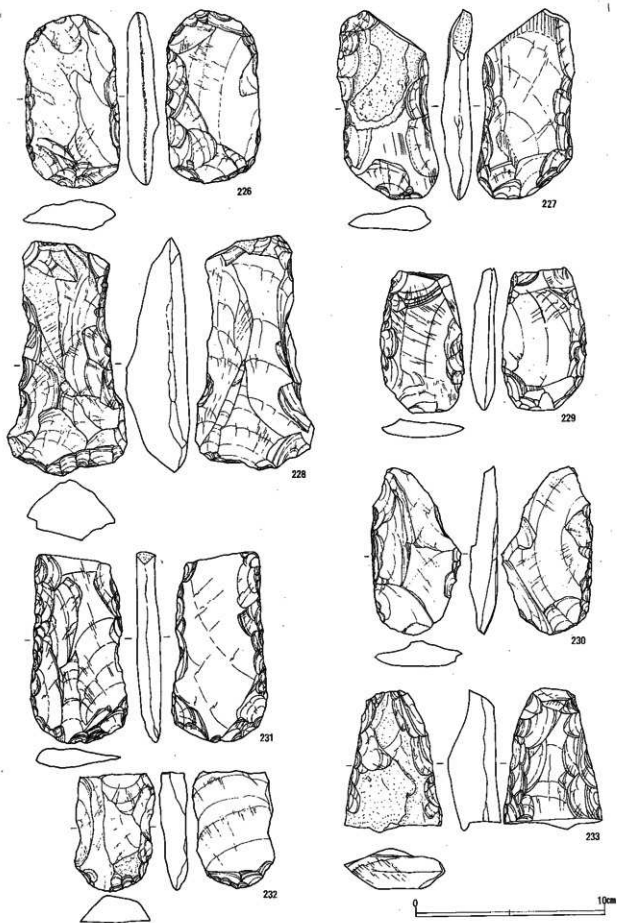


圖44. 石器(10) (1:2)

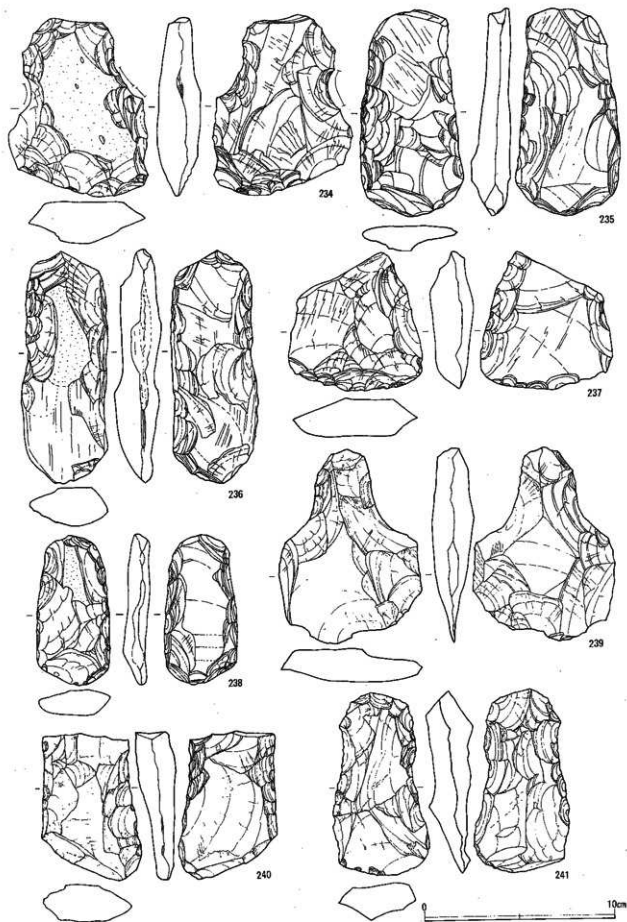


图45 石器(2) (1:2)

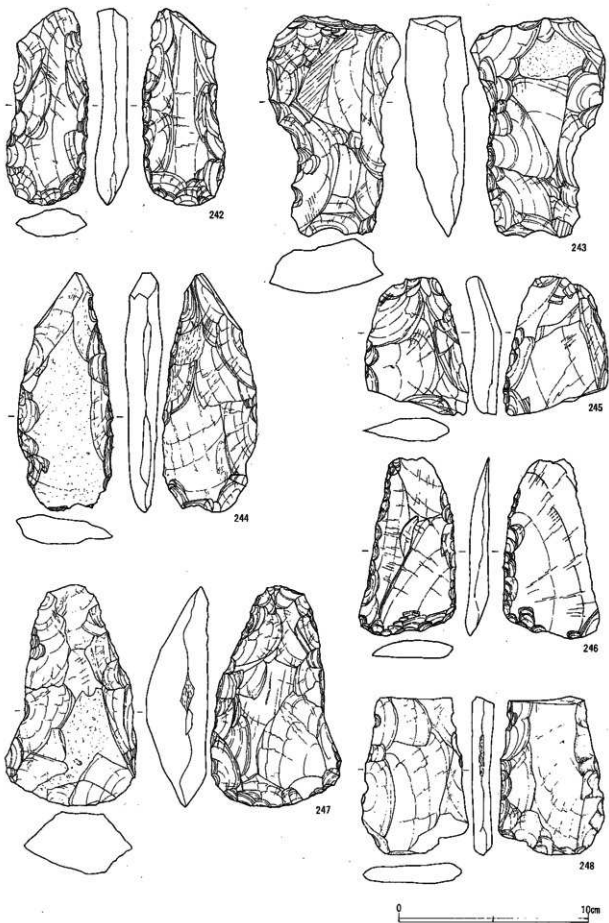


圖46 石器(13) (1:2)

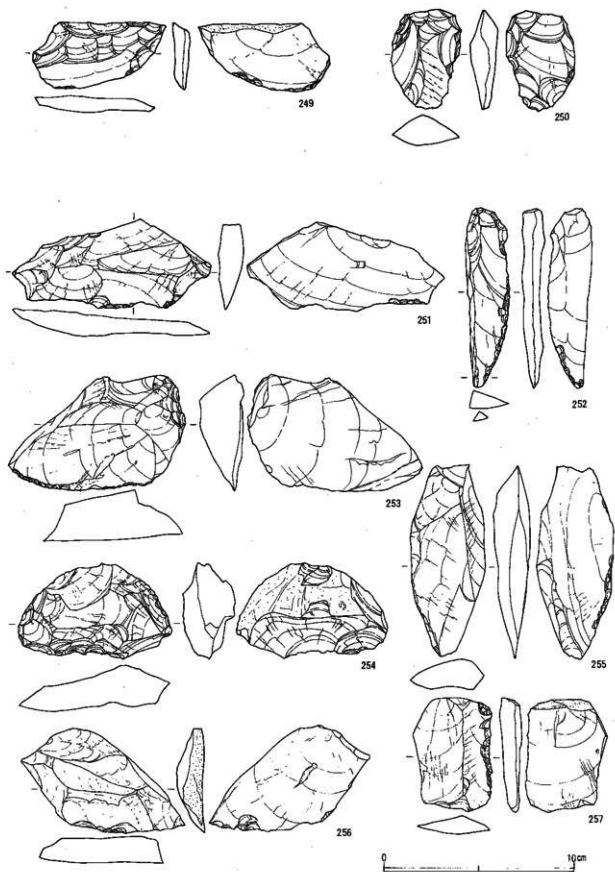


圖47 石器(14) (1:2)

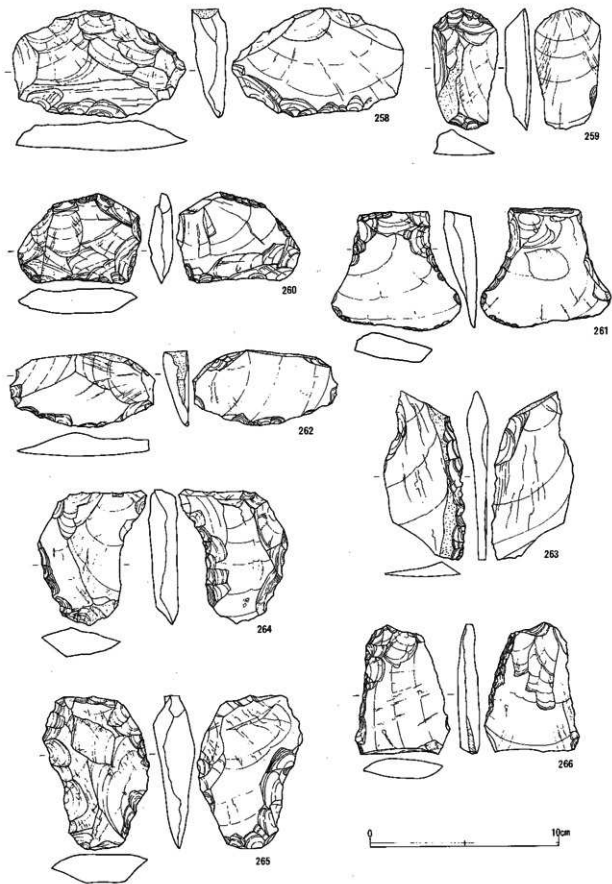


图48 石器(时) (1:2)

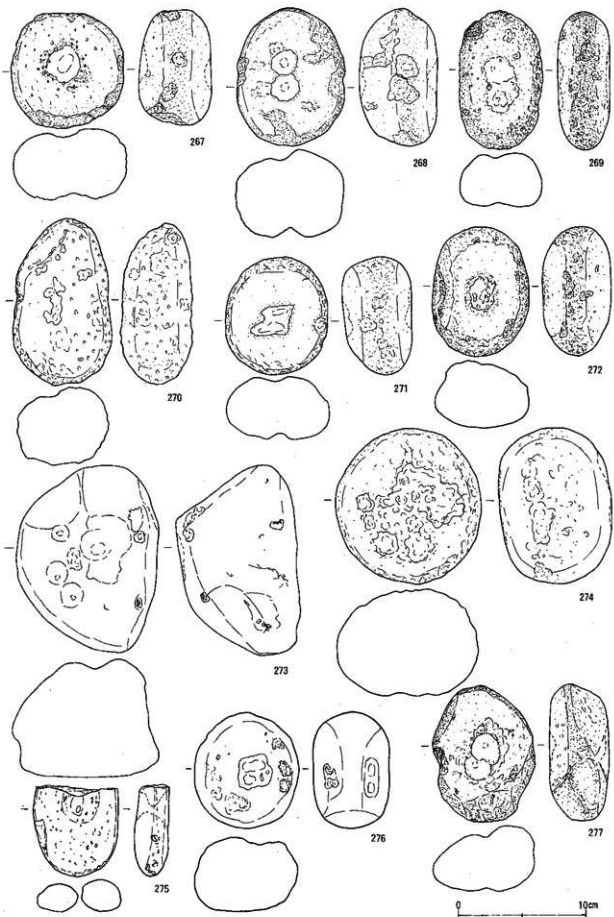


图49 石器(6) (1:3)

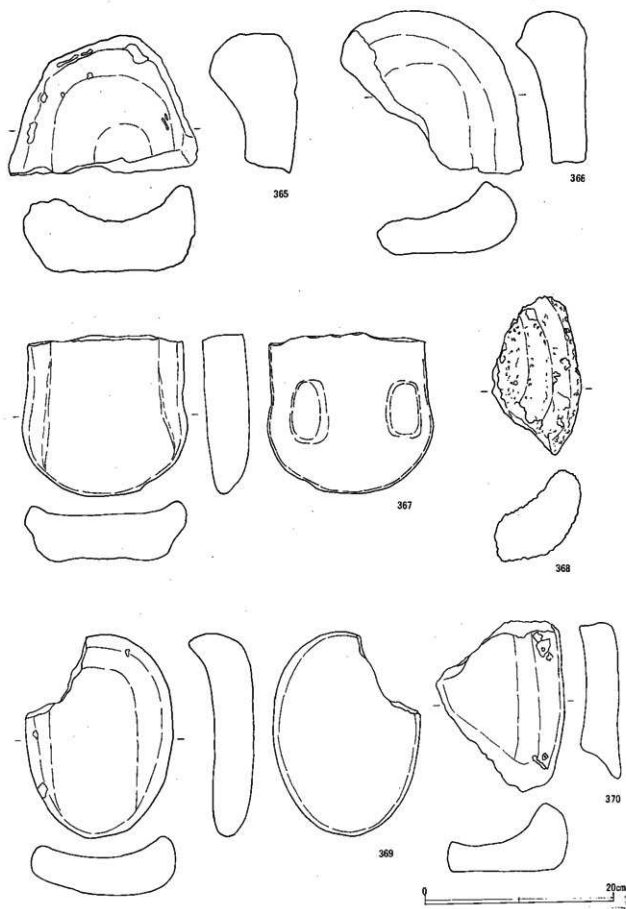


图58 石製品(29) (1:4)

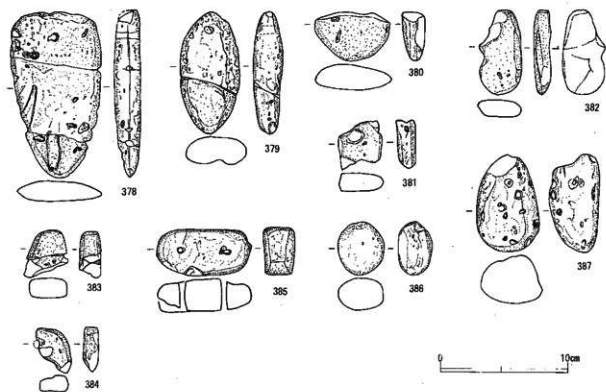
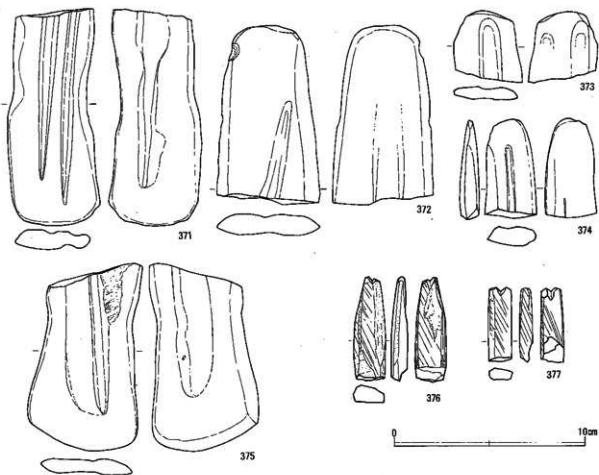


图59 石製品図 (1:2、1:3)

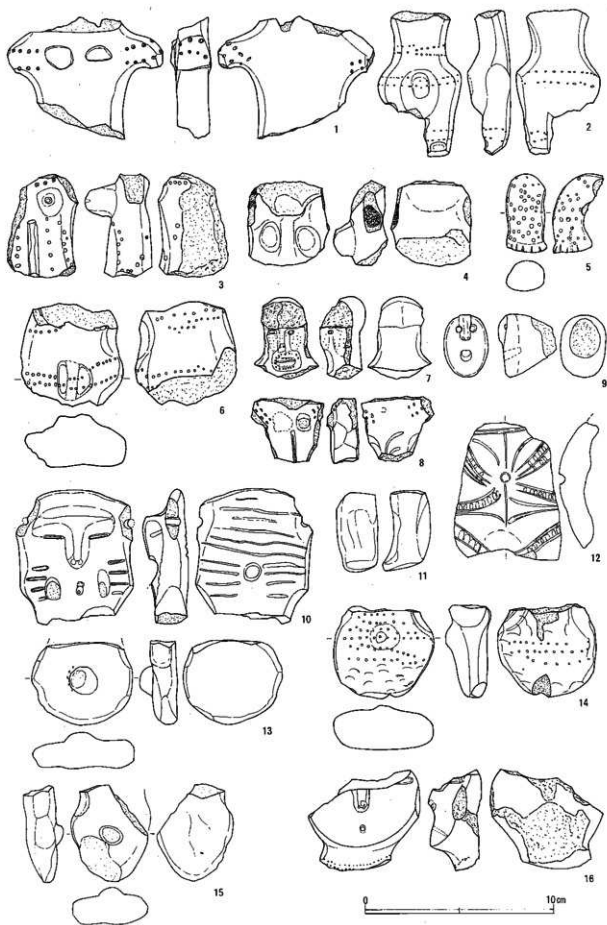


图60 土偶 (1:2)

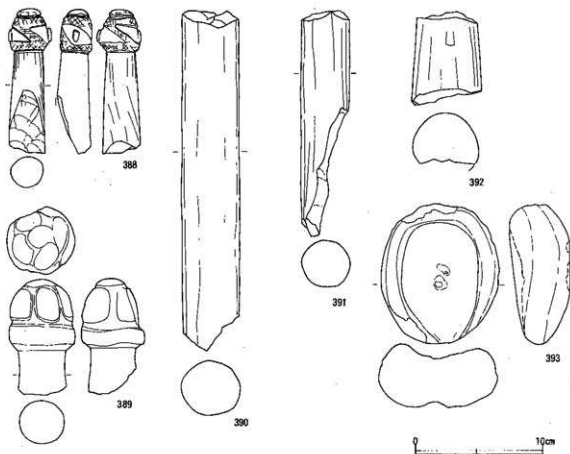
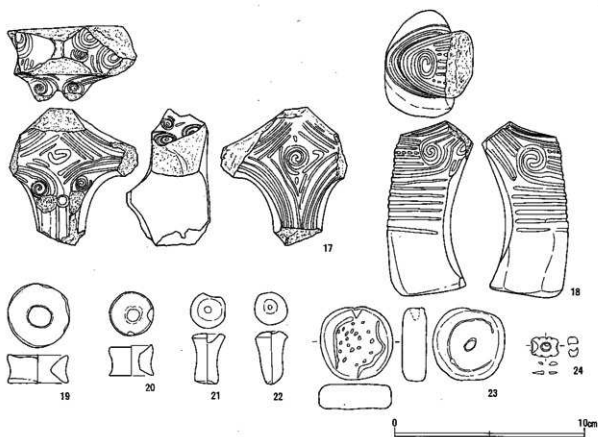


图61 土偶·石棒 (1:2、1:3)

番号	石器名	遺構・グリット	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	固体番号
273	くぼみ石	F-6	砂岩	14.7	11.2	9.9	1760.0			F-6 集石箇所
274	くぼみ石	H-15	砂岩	12.2	11.5	8.9	1490.0			H-15 187
275	くぼみ石	E-20	砂岩	7.2	6.7	2.7	145.3			E-20
276	くぼみ石	H-21	砂岩	9.1	8.3	6.1	655.9			H-21 561
277	くぼみ石	E-4	砂岩	10.7	8.2	4.7	430.6			E-4 トレンチ
278	くぼみ石	F-15	砂岩	10.6	8.4	6.3	716.8		磨石	F-15
279	くぼみ石	F-15	砂岩	10.5	5.8	5.4	402.2	○		F-15 58
280	くぼみ石	F-6	砂岩	12.7	7.2	5.7	610.7		磨石	F-6 5層
281	くぼみ石	F-6	砂岩	12.0	10.0	4.7	657.6			F-6
282	くぼみ石	J-20	砂岩	11.8	8.6	3.5	415.4			J-20
283	くぼみ石	G-15	砂岩	11.9	7.8	6.6	801.4	○		G-15 130
284	くぼみ石	H-16	砂岩	9.3	7.4	6.5	518.6			H-16 374
285	くぼみ石	G-19	砂岩	7.4	6.7	3.0	175.0	○	磨石	G-19
286	くぼみ石	G-20 P3	砂岩	6.4	6.8	4.6	189.8			G-20 P3
287	くぼみ石	F-6	砂岩	11.6	8.7	6.9	830.1		磨石	F-6 帯①
288	くぼみ石	G-18	砂岩	9.1	8.3	6.2	682.5			G-18
289	くぼみ石	G-12 P7	砂岩	6.5	6.0	5.8	228.5			G-12 P7
290	くぼみ石	G-19	砂岩	8.5	5.9	4.0	231.4			G-19
291	くぼみ石	F-6	砂岩	11.2	7.6	4.9	613.3	○	磨石	F-6 5層
292	くぼみ石	F-5	砂岩	12.0	6.7	6.2	674.2			F-5
293	くぼみ石	G-14	砂岩	10.9	8.4	6.7	823.2			G-14
294	くぼみ石	G-9	砂岩	11.9	10.3	8.8	1600.0			G-9 3
295	くぼみ石	H-15	砂岩	11.6	9.3	7.4	1173.7		磨石	H-15
296	くぼみ石	H-28	砂岩	12.3	7.4	3.8	442.0			H-28 888
297	くぼみ石	H-23	砂岩	11.0	8.8	6.3	608.9		磨石	H-23 107
298	くぼみ石	F-12	砂岩	12.7	7.5	4.1	499.1		磨石	F-12
299	くぼみ石	G-12	砂岩	8.0	7.2	4.1	325.0			G-12
300	くぼみ石	G-23	砂岩	8.3	6.7	3.5	244.6			G-23 204
301	くぼみ石	D-2	砂岩	9.5	8.8	5.2	338.6			D-2
302	くぼみ石	H-15	砂岩	13.2	12.5	8.5	2090.0		磨石	H-15
303	くぼみ石	G-15	砂岩	13.1	10.4	9.3	1850.0		磨石	G-15 159
304	くぼみ石	SX3	砂岩	10.6	7.9	4.9	541.4			SX3
305	くぼみ石	I-4	砂岩	8.7	7.8	5.9	559.8		磨石	I-4
306	くぼみ石	SX2	砂岩	9.0	7.6	7.3	880.5			SX2

表13 掲載石器計測表 (9)

番号	石器名	遺構・グリット	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	固体番号
307	くぼみ石	SX2	砂岩	13.0	5.6	3.1	396.8			SX2
308	くぼみ石	E-4	砂岩	9.0	8.3	7.1	602.4			E-4 トレンチ
309	くぼみ石	SK70	砂岩	9.6	7.7	6.2	616.6		磨石	SK70
310	くぼみ石		砂岩	11.4	6.7	3.8	459.6		磨石	
311	くぼみ石	H-16	砂岩	9.4	6.4	4.6	342.3			H-16 184
312	くぼみ石	H-6	砂岩	8.4	7.3	3.4	290.4			H-6
313	くぼみ石	H-8	砂岩	11.8	10.1	5.9	782.2			H-18
314	台石	D-2	砂岩	18.5	18.2	10.0	4600.0			D-2
315	磨石	G-9	砂岩	14.6	14.1	12.9	3750.0			G-9 4
316	有孔石	G-24 P1	砂岩	28.7	27.6	8.1	9250.0			G-24 P1
317	蔽石	F-5	砂岩	11.3	4.6	3.8	401.9			F-5 3層
318	蔽石	F-6	砂岩	10.6	5.5	3.8	244.6	○		F-6 1層
319	蔽石	SK11	砂岩	13.1	7.1	5.3	694.6	○		SK11
320	蔽石	E・F-4	砂岩	16.9	5.8	2.9	480.2			E・F-4 トレンチ
321	蔽石	G-9	砂岩	23.4	8.3	7.2	1850.0			G-9 6
322	蔽石	F-5	砂岩	11.3	8.2	7.3	1176.7	○		F-5 3層
323	蔽石	E-10	砂岩	10.6	6.1	4.6	384.2			E-10
324	蔽石	F-6	砂岩	11.6	6.2	8.1	566.9			F-6 集石箇所1層
325	蔽石	SK72	砂岩	14.2	7.6	8.0	1064.4			SK72
326	蔽石	F-6	砂岩	9.8	3.2	2.9	133.3			F-6 2層
327	蔽石	SK50	砂岩	11.1	3.3	2.3	129.1			SK50
328	蔽石	SK34	砂岩	12.1	3.2	3.0	176.8			SK34
329	磨石	F-6	砂岩	11.1	8.7	6.2	909.7			F-6 1層
330	磨石	D-9	砂岩	7.3	5.9	4.1	275.3			D-9
331	磨石	SK68	砂岩	4.4	3.9	3.0	57.3			SK68
332	磨石	G-9	砂岩	7.1	6.1	4.2	247.1			G-9
333	磨石	SB2	砂岩	10.5	9.3	5.9	886.2			SB2
334	磨石	E-3	砂岩	12.6	6.7	6.0	626.3	○		E-3 トレンチ
335	磨石	E・F-4	砂岩	8.0	7.5	6.4	554.9			E・F-4 トレンチ
336	磨石	E-3	砂岩	9.1	5.7	5.1	370.8			E-3 1層
337	磨石	SX11	砂岩	13.4	9.0	7.3	1170.3			SX11
338	磨石	H-24	砂岩	10.2	9.1	6.7	880.2			H-24 23
339	磨石	E-9	砂岩	10.8	7.6	5.6	554.6			E-9
340	磨石	G-9	砂岩	9.6	8.7	7.6	879.3			G-9 5

表14 掲載石器計測表 (0)

番号	石器名	透徹・グリット	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	固体番号
341	磨石	F-20	砂岩	10.6	9.5	7.1	1115.8			F-20 1
342	磨石	H-23	砂岩	5.7	5.3	4.0	129.5			H-23 121
343	磨石	SK 2	砂岩	9.1	7.4	5.9	632.8			SK 2
344	磨石	なし	砂岩	8.7	8.0	5.8	631.9			H-23 645
345	磨石	H-23	砂岩	10.6	8.2	3.7	604.0			H-23
346	磨石	SX 3	砂岩	7.1	6.8	5.4	337.2			SX 3
347	磨石	SX 3	砂岩	7.7	7.2	6.4	525.4			SX 3
348	磨石	G-6	砂岩	9.5	7.2	7.2	775.3			G-6
349	磨石	SX 2	砂岩	7.7	7.0	5.3	378.4			SX 2
350	磨石	F-11	砂岩	8.4	7.6	6.6	618.1			F-11
351	磨石	SX 3	砂岩	9.5	6.7	4.1	318.3			SX 3
352	磨石	H-16	砂岩	7.1	5.5	4.7	281.6			H-16 373
353	磨石	F-23	砂岩	12.9	8.3	5.4	934.8			F-23 192
354	磨石	G-10	砂岩	9.1	8.1	5.7	566.3	○		G-10
355	磨石	G-15 P 8	砂岩	7.8	6.7	5.2	376.6			G-15 P 8
356	磨石	D-9	砂岩	9.0	7.9	7.1	712.0			D-9
357	磨石	H-23	砂岩	9.3	6.6	5.9	606.8	○		H-23 108
358	磨石	E-4	砂岩	11.0	7.3	7.0	777.2			E-4 トレンチ
359	磨石	E-19	砂岩	9.6	7.7	7.1	731.8			F-19
360	磨石	H-22	砂岩	10.3	9.2	5.8	730.5			H-22 646
361	磨石		砂岩	6.5	5.4	2.5	60.8			
362	磨石	E-F-8	砂岩	9.5	7.3	5.4	496.1			E-F-8 敷石
363	磨石	G-14	砂岩	9.4	8.7	8.2	987.5			G-14
364	磨石	SX 2	砂岩	8.7	7.9	7.4	651.9			SX 2
365	石皿	F-6	安山岩	14.7	19.7	9.2	2850.0	○		F-6 敷石面所1層
366	石皿	E-21	安山岩	17.4	18.2	7.2	2160.0	○		E-21
367	石皿	F-5	安山岩	17.0	17.3	4.8	2160.0	○	脚付	F-5 1層
368	石皿	G-12	安山岩	16.9	9.4	9.6	988.4	○		G-12
369	石皿	G-18	安山岩	21.5	15.5	6.7	1850.0	○		G-18
370	石皿	G-16	安山岩	18.1	13.4	4.1	1440.0	○		G-16 341
371	砥石	F-12	砂岩	11.3	4.9	1.1	77.5	○		F-12
372	砥石	H-7	砂岩	9.4	5.4	1.1	73.0	○		H-17
373	砥石	F-23	砂岩	3.7	3.5	0.6	14.5	○		F-23 118
374	砥石	G-24	砂岩	5.2	2.7	1.1	15.1	○		G-24 79

表15 掲載石器計測表 (1)

第5章 まとめ

東原遺跡は、昭和18年藤森栄一氏が「信濃下水内郡桑名川の土器」というタイトルで、人類学雑誌第58巻3号に東原遺跡出土遺物を紹介されて以来、県内屈指の縄文後期遺跡として学会に知られるに至った。

「信濃資料第1巻下」の要説の中でも、県内における加曾利B式の代表遺跡として取り扱っている。このように学会に知られた本遺跡も、昭和24年小田切茂氏等を中心とする飯山北高等学校郷土研究会の調査及び昭和27年秋の神田五六氏の調査以後、ほとんど省みられることなく40数年経過した。

その間、遺跡内に郵便局や民家が建築され、さらには畑地として手入れの行き届いていた千曲川への傾斜面も農業構造の変化の中でまったく荒廃し、雑草が生い茂り様相が一変している。

さて、かつて小田切茂氏等が中心となって発掘調査した、a・b・c地点については、小田切茂氏が故郷を離れられて以来判然としなかったが、小田切氏が地図上に地点を明示していただくことができた。同氏に厚く感謝申し上げたい。

今回の調査は千曲川築堤工事にともなう調査であり、小田切茂氏および神田五六氏が調査したb・c・d地点にあたり、東原遺跡の中心部と思われる地点である。

発掘調査の結果は、住居址や土坑・配石等が発見され、多量の遺物が出土した。土層の状況やその後の地殻変動により遺構の検出が困難であったため、必ずしも良好な調査結果とはならなかった。しかしながら、多くの遺構や遺物の検出は、当該地が東原遺跡の中心地であり、また、縄文時代後期中葉の加曾利B式期を中心とした年代であることが明らかになった。さらには、環状組石炉と呼ばれる集落の共同祭祀場所と考えられる遺構の発見、これに覆屋がかけられていたと推定されたことは、縄文後期における祭祀形態の一端が伺える好資料となろう。

今回の報告書では、時間的な都合や出土遺物の多さから、遺構および遺物のすべてを整理して報告することができなかった。特に土器については、ほんの一部の報告にとどまっている。これらについては、調査団の責任として今後整理して報告したいと思っている。

末筆ながら、調査を実施するにあたり委託者の長野県飯山建設事務所をはじめ地元岡山地区の関係者にご協力いただいた。また、調査にご指導いただいた、桐原健氏、宮下健司氏、早津賢二氏、小島正巳氏、そして発掘調査に従事された作業員の皆様に衷心より感謝申し上げる次第である。

PLATE



遺跡近景 (対岸ほぼ中央)



調査風景

PL 2



敷石住居址



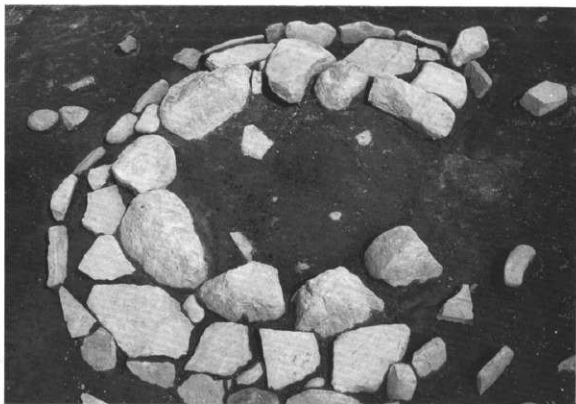
配石 (SH2)



S B 1 内柱痕出土状況



柱痕切り口面



環状組石炉



掘立柱建物址と環状組石炉



石皿出土状況



アスファルト出土状況



耳飾出土状況



磨製石斧出土状況



土偶出土状況



石棒出土状況



屋外埋設土器 (SK55)



屋外埋設土器



屋外埋設土器 (SK83)



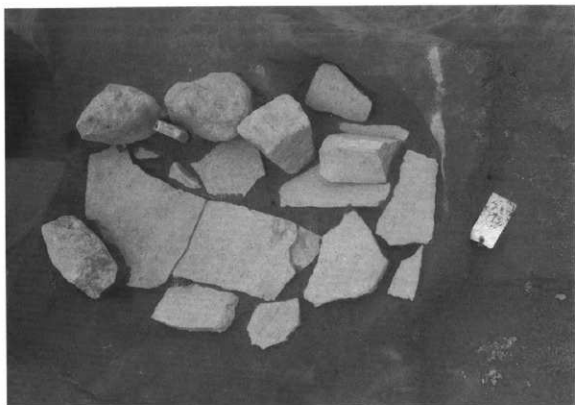
六角形注口土器出土状況



小形土器出土状況



注口土器出土状況 (E-20 P3内)



配石基 (SK12)



土層のズレ



土層堆積状況



傾いたビット



調査区近景



調査風景



調査風景



遺物出土状況



配石址の調査



屋外埋設土器調査風景

PL 12

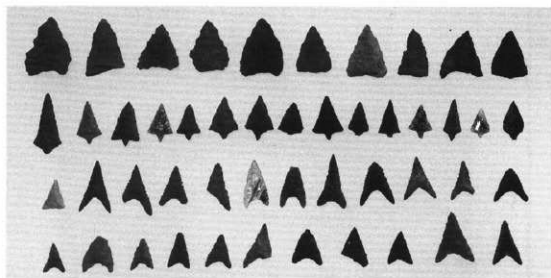
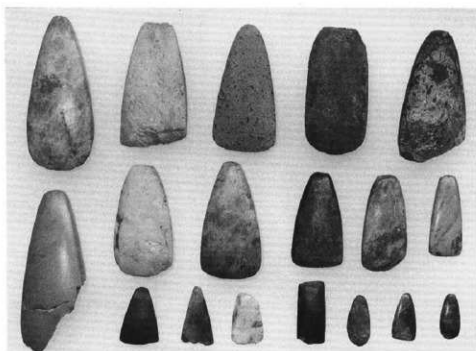


出土遺物（土器）

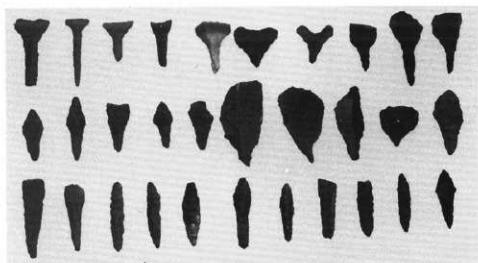


出土遺物（土器）

PL14

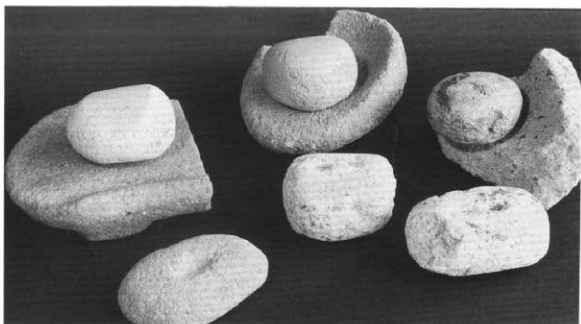


出土遺物 (上磨製石斧 下石鏃)



出土遺物（上石鏃 中浮子・石鏃 下砥石）

PL16



出土遺物（上石皿・くぼみ石・磨石 下石棒）



出土遺物（上土偶 中耳飾 下ミニチュア土器）

飯山市埋蔵文化財調査報告 第58集

東 原 遺 跡

平成10年3月15日発行

編集・発行 長野県飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1,110-1

印 刷 (有)足立印刷所

